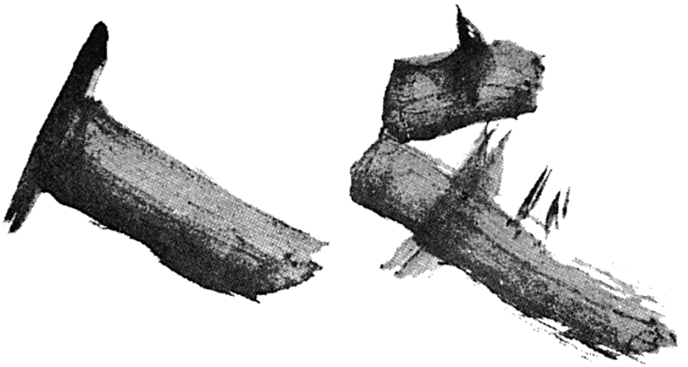


第七〇号

2023

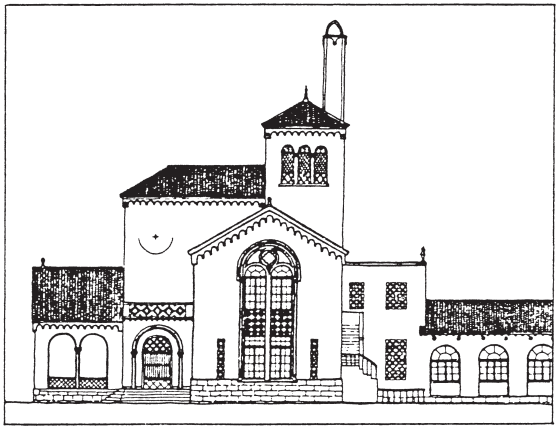
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389－147X

人　文　第七〇号

2022年4月―2023年3月

も　く　じ



随想

「女性枠」をめぐって贈る言葉 …… 竹沢　泰子 …… 1

分館収蔵庫 …… 岡村　秀典 …… 9

講演

夏期公開講座　名作再読14

デカルト『方法叙説』を読み直す――「私」と「方法」 …… 佐藤　淳二 …… 9

玄奘と仏光王――玄奘三蔵の伝記を読み直す …… 倉本　尚徳 …… 17

でたらめな「僕」の批評性――安岡章太郎短篇作品の魅力 …… 藤野　志織 …… 22

彙報

講演会ポスターギャラリー二〇二二 …… 28

共同研究の話題

火中の栗を拾う――京大人文研で「日本の伝統文化」を問い直すということ―― …… 菊地　暁 …… 39

研究班を終えて …… 竹元　規人 …… 45

途上の実験的プロジェクト、「実験性の生態学」 …… 石井　美保 …… 49

オンライン会読・アラビア語検索・翻訳 …… 稲葉　穣 …… 53

古典中国語と系列ラベリング …… 安岡　孝一 …… 57

所のうち・そと

生きる身体のおどろおどろしさ …… 酒井　朋子 …… 61

ミュージックと「いにしへまなび」 …… 金　智慧 …… 65

「大体できてる」 …… 福谷　彬 …… 69

書いたもの一覧 …… 73

「女性枠」をめぐって贈る言葉

竹沢泰子

退職して間もない四月初め、興味本位から名誉教授の授与式に参列した。会場に入った途端、ほぼ黒一色の光景を見て改めて思い知らされた。この世代の教授職にいかに女性が少なかったかを。女性出席者は（理事を除くと）三名のみ。新名誉教授八五名中、女性と思われる名前をもつ者は五名であった。他方、女性教員の採用が一気に進んだのもこの世代以降である。

一九九九年の着任当時、人文研における女性所員は、数名の助手（当時）を除き皆無であった。正確に言えば、中国女性史研究で国内外から高い評価を得たのち、古巣に還暦前に教授として迎えられた東方部の小野和子先生が第一号であったが、すでに退職されていた（小野先生は、矢野暢セクハラ事件において、女性教員懇話会の取りまとめ役として大きく貢献されたことでも知られる）。

後になって聞いた話だが、七十年の歴史を通して助手を除き女性所員が存在しなかった西洋部・日本部（当時）では、その数年前から女性候補者探しを始めていた。通常は共同研究の班

員や知り合いから候補を選ぶのだが、縁もゆかりも面識もない人間に声をかけるという「大きな賭けに出た」という。そういうわけで、私は今でいう女性枠で採用されたことになる。

女性枠は、当事者が実力不足であるにもかかわらず女性であるがゆえに採用されたかのようにみなされる、と考える教員がジェンダーを問わず少なくない。日本における議員や企業管理職等における女性比率の低さが昨今話題となっているが、大学は企業のように多様性の欠如がもたらす不利益が目に見える形で表出するわけでもなく、また特に国立大学では安泰が保証されていることから、女性（や他のマイノリティ）の採用・昇進が最も遅れている業界の一つだといわれている。

したがって、私は、こうした課題を抱える大学において次世代の有能な女性研究者の比率を迅速に高めるためには、現状では女性枠しか有効な手段はないと考えている。ちなみに日本も批准している女性差別撤廃条約第四条では、「締約国が男女の事実上の平等を促進することを目的とする暫定的な特別措置をとることは、この条約に定義する差別と解してはならない」と明記されている。

そうした考えから、自分は女性枠で雇われたと機会があれば公言することにしている。むろんそれによって私の研究者としての評価を下げる、あるいは上から目線で「生意気」だとみなす男性研究者らもいることだろう。しかしそうした一部の男性たちの目を気にするよりも、女性枠で採用されたことを一向に

恥じない女性研究者も存在するのだと、この問題を考え直す研究者や、勇気づけられる後進の女性研究者が一人でも増える可能性に希望をつなぎたいと考えるからである。

これまでは「男性枠」によって男性たちが採用・昇進されてきたのだというフェミニストらの主張には十分うなずける。女性や三浪以上の受験生に対する一律減点措置が発覚した一部の医学部・医科大学での入試不正事件を持ち出すまでもなく、象牙の塔において女性たちはしばしば採用から排除されてきた。そればかりではなく、『京都大学　男女共同参画への挑戦』（二〇〇八）が明らかにしているように、女性教員は職階との関係で言えばピラミッド型、男性は逆三角形であり、総数の増加率だけでは可視化されにくい職階をめぐる構造的問題も根強く存在する。昇進用の女性枠が運用されたことは記憶に新しいが、保守的な京都大学が重い腰を上げたのも、文科省による大学評価という外圧があってのことである。

しかし「男性枠」の議論以上に私の考えに影響をもたらしたのは、昔ロサンジェルスで行ったフィールドワークで出会ったある黒人リーダーの言葉であった。積極的是正措置（アファーマティヴ・アクション）をめぐって彼女曰く、公民権運動の興隆から約四〇年（当時）が経過したものの、その効果は期待していたほど見られない。多くの白人企業や組織は、有能な黒人の人材確保は困難だと黒人雇用率の低さを釈明しようとする。しかし実態は、そうした企業が積極的に身を乗り出して有能な

人材を探そうとしないだけだ。白人中心の世界やネットワークから出て、黒人たちに近づけば必ず有能な候補者は見つかるものだ。こうした彼女の言葉に私は強く印象づけられた。

上野千鶴子による『おんな嫌い―日本のミソジニー』は、格別彼女のファンでもない私にも説得力をもつ。大学も、おんな、特に目立つおんな、が苦手で嫌いだというミソジニーとけっして無縁ではない。感情が先行するゆえに、理屈は後づけされる。そうした男性らは男性のなかでもごく一部に過ぎないのだが、大抵の場合、当人たちには、自分がミソジニストの当事者だという自覚が欠如しており、あいつが悪いからだという個別の問題に帰する。それが活躍する女性の少ない職場では、驚くほど共通した現象だということを知らずに。

多様性の確保は、少数派に対する差別是正のためにのみ必要なわけではない。アメリカの人種研究では、一九六〇年代における女性や黒人らの研究者の増加により、この分野が飛躍的進展を遂げたとされる。分野を問わず、学問の進化には新しい発想や視点が常に欠かせない。そして多様性の確保は、同質性の高い空間において不正や不条理な理屈がまかり通ることの抑止力にもなりうる。私が退職記念講演会の最後に話した「少数派の声によって社会は成熟してきた」という言葉を最後にもう一度贈り、人文研のさらなる発展を期待したい。

分館収蔵庫

岡村秀典

北白川分館の東側に「収蔵庫」という別棟がある。面積二三一平方メートル、鉄筋コンクリート造の平屋で、内部は積層書架になっている。いま上層に中文の新学書が配架されているため、新入所員に「書庫」とまちがえられたことがある。この収蔵庫と収蔵品については桑山正進先生が「北白川の収蔵庫」（所報『人文』第四九号、二〇〇二年）の中で詳説しているが、改めてその由来を書いておきたい。

収蔵庫の位置には、もともとテニスコートがあった。旧東方文化学院京都研究所「所員須知」第一条に「所員保健ノタメ所内ニテテニスコートヲ設ク。但シ勤務時間中ハ之ヲ使用スルコトヲ得ズ」とあり、羽田亨・塚本善隆・内藤乾吉・小川茂樹ら東洋史出身の所員がその常連であったという（『人文科学研究所五〇年』、一九七九年）。戦争中は食糧難のためイモ畑になり、終戦後、分館の主屋は進駐軍の接収をまぬがれたが、ここに木造平屋の軍用車庫が建てられた。進駐軍の退去した後、半分は研究所の公用車の車庫、半分は戦前・戦中に中国で収集された

土器や瓦、戦後に東亜考古学会が壱岐・唐津で発掘した出土品などの収蔵に利用された。しかし、建物の老朽化により保管状況が悪化したうえ、イラン・アフガニスタン・パキスタン調査隊（イアパ）が持ち帰った考古資料で飽和状態になった。一九七五年に東一条の本館が竣工したとき、イアパ収集の金属器など一部の貴重資料は本館に一室を借りて移したが、ついに収蔵庫を新築することになった。地下に想定された北白川縄文時代遺跡の事前発掘は林巳奈夫・桑山正進先生が担当し、遺構の検出により当初計画よりやや南側にずらして一九八〇年に竣工した。これが現在の収蔵庫で、主屋と同じようなスパニッシュ風の瓦葺き屋根である。室内の温度管理はできないが、除湿機のドレーンは備えられている。同年の所報『人文』第二二号によれば、五月二二日（木）午後四時より沢田敏男総長をはじめ学内関係者や工事関係者など約四〇名の臨席をえて「資料収蔵庫」の竣工披露がおこなわれ、考古資料のほか地理民族資料・古地図・影照本など約二八万点の収蔵を予定していたという。

ところが、そのころ文学部では本部構内の陳列館を一部取り壊して博物館を新築する計画がもちあがり、文学部考古学講座の保管する厖大な考古資料の疎開先として白羽の矢が立てられたのが分館収蔵庫であった。収蔵庫の下層には人文研の考古資料・石刻拓本類・写真資料などがすでに収納済みであったから、文学部のそれは上層に運び入れることになった。文学研究科の大学院生だった私は搬入作業を手伝ったが、土器片で満たされ

た木箱はずっしりと重く、収蔵庫の階段を汗だくで上り下りしたことは記憶に新しい。一九八六年、文学部博物館新館が竣成し、分館収蔵庫に仮置きされていた考古資料は戻された。しかし、その空いたスペースに収納されたのは、主屋の書庫や研究室に詰め込まれていた新学書であった。東一条の本館に疎開していた考古資料が戻ってきたのは、本館が本部構内に移転した二〇〇八年のことである。運搬は日通美術品輸送に委託したが、収蔵庫の下層に収容スペースを確保するのに苦労した。

私は在職中に三件の考古資料を整理した。一件目は日本学術振興会が文学部の梅原末治先生を代表者として一九四二年に発掘した遼寧省大連市文家屯貝塚・東大山積石塚の出土品である。この資料は調査に参加した澄田正一先生が整理のため名古屋に持ち出したまま亡くなったので、一九九九年に私はそれらを人文研に搬入し、大学院生たちの協力をえて『文家屯』（真陽社、二〇〇二年）を公刊した。貝塚からは玉器や石器の未成品、山頂の積石塚からは南海産のツノガイが出土し、紀元前三千年紀における山東半島との交易が明らかになった。二件目は東方文化研究所が一九三八～四四年に雲岡石窟とその周辺で収集した新石器・戦国・秦漢・北魏・遼金時代の土器・陶磁器・瓦や石器・石仏などである。当時大学院生の向井佑介さんは、北魏・遼金時代の瓦を整理し、その編年をもとに石窟寺院の景観変遷を明らかにした。この成果は『雲岡石窟』遺物篇（朋友書店、二〇〇六年）としてまとめたが、中国社会科学院考古研究所と

の共編になる『雲岡石窟』全二〇巻四二冊へと展開する端緒となった。三件目は一九六七年にパキスタン考古局との協定により将来されたガンダーラ寺院址出土の石彫・ストゥッコ・土器などである。その学術的な価値は桑山先生が「北白川の収蔵庫」でも強調されているが、私たちはその成果を総合博物館の二〇〇八年秋季企画展「シルクロード発掘七〇年―雲岡石窟からガンダーラまで」として開催し、展示図録を臨川書店より公刊した。

土や埃にまみれた土器や瓦のかけらは、書斎派の研究者にとって価値のないものかもしれない。しかし、戦中・戦後のきびしい情勢の中で海外から持ち帰ったこれら考古資料は、収蔵庫において永遠に保管し、新しい見方で継続的に調査研究するだけの学術的な価値がある。微力ながら、そのことだけは明らかにできたと自負している。

講演

夏期公開講座

名作再読――いま読んだらこんなに面白い14

デカルト『方法叙説』を読み直す

――「私」と「方法」

佐藤淳二

ルネ・デカルト（一五九六―一六五〇）は、近代フランスを代表する思想家であり、「われ思う、ゆえに、われ有り」という誰もが知っている言葉を残したが、この言葉を含む彼の『方法叙説』は、理性的な思考のモデルと評価され、「名作」として長く我が国でも親しまれてきた。この書物は小さいが、その内容は極めて重大である。その重大性を確認すること、これを講座の目標として設定した。

書物は、六つのパートから構成され、一般には次のように概括されている。

第1部　歴史論（著者デカルトの個人史、生涯の物語）、第2部　論理学（諸学問の基礎論）、第3部　道徳、第4部　形而上学（存在するとは何か、神とは何かなど）、第5部　科学論（数学など科学の基礎付け）、第6部　読者ないし公衆への呼びかけ（知への誘い）。

この見取り図は、学問論、学問方法論、科学と知の関係の全体を見通すという構成に主眼をおいたものと言えるだろう。もちろん、この書物を動かしている独特な運動があり、そこには当然ながら矛盾や衝突が見受けられる。それ故にこそ、とりわけこの百年ほどに渡ってデカルト解釈が世界中で次々と出現し、それは宗教史や科学史の位置付けといった「純粋に」歴史的な学問論争というにとどまらず、先端的な論理学や政治思想史といった広範な場面で、生き生きと展開され続けているのである。まさに「名作」は死なないとい

うことであろうか。

簡潔だが多種多様の分野を含む複雑な書物として『方法叙説』は、私たちの前にあるのだが、これをどう読んでいったら良いのか。デカルト自身は冒頭で、私たちを励ましてくれているのかもしれない。「良識はもっとも公平に分配されている」という有名な冒頭の言葉は、たとえここでの「良識」が、真理を見極める繊細な判断の力という意味だとしても、二十一世紀の私たちは、専門家でなくともこの書物をよむべしという励ましと受け取って構わないだろう。私たちもそれぞれ自分の良識でこの書物を読解し、判断していくことにしたい。

端的に言えば、この書物の意義は、知と生の統合を目指し、科学と形而上学ないし道徳論の統一への意志を鮮明にした点にあるだろう。デカルトの生きた時代は、知が根底的に変革されるいわゆる「科学革命」の時代であったこと、これを忘れてはならない。新しいパラダイムの登場は、古いパラダイムとの衝突なしには済まないのであろうが、その象徴が、新しい世界観を提唱したガリレオへの弾圧であった。デカルトも一六三三年のガリレオ裁判などから、著作の発表を控えるといった影響を蒙っている。しかし、デカルトは科学と哲学、知と生き方を統合するという意志を保ち続けたのである。科学は科学、人生は人生というような都合のよい分け方を彼はしない。先に述べたように、デカルトの『方法叙説』は、論理学・科学論・形而上学・道徳論などの多様なパーツの接続であり、一見すると、とりとめのない異種混合の系列に沿うように見える。しかし、この書物は、それに続く三つの試論すなわち『屈折光学』・『気象学』・『幾何学』への一種の「序論」の位置にあることを考え合わせよう。そうすれば、『方法叙説』での自伝的とも言える知の遍歴と、学問をその基礎まで解体してから再構築しようという強い意志、その中での形而上学的哲学的問題群の位置付けなどなどが、生き方の問題として提起され、そして後続する新しい科学理論に接続するという壮大な意図といったものが、見えてくるであろう。

このような壮大な科学の知への「序説」が、知的な自伝、私的な「自分語り」を含んでいることに、どのような意味があるのだろうか。それは、科学の知と自分の思想とが、激しくそして深くぶつかり合い、統合を求めているということを、意味している。知と人生の統合を、科学にまで推し進めるのである。そもそも、科学の知と自分自身の思想・哲学・道徳とを一貫して考えることは、今日の私たちにもますます難しくなっている課題だろう。デカルトの十七世紀にあっても、

これは実に困難な問題であった。かのニュートン（一六四二―一七二七）が魔術マニアと噂されるのはさておくとしても、政治哲学の巨人である英国のトマス・ホッブズ（一五八八―一六七九）でさえ、彼の科学への深い理解を、その宗教・哲学思想にどこまで統一していたかといえば、議論の分かれるところであろう。その中でデカルトは、科学の当時の最先端の知見と自らの思想・形而上学を統一しようと明確に意志していたのだと考えたい。今もなお『方法叙説』というこの小さな書物が、私たちに語り掛けることを止めない理由の一つは、この点にあると思われる。有限の人間が無限を考え得るということは、それ自体驚くべき事であるが、デカルトは近代の端緒に、この問題を新しく標づける意義深い仕事を残してくれたのである。

玄奘と仏光王

――玄奘三蔵の伝記を読み直す

倉本尚徳

玄奘の伝記史料は数種あるが、その中でも最も詳細で史料価値の高いものが慧立撰・彦悰箋『大慈恩寺三蔵法師伝』全十巻である。

この書の序文には、成立に複雑な経緯があったことが記されている。すなわち、玄奘の弟子の慧立がその西域行を中心に五巻本を撰したが、玄奘があまりにも偉大なため、数多くの善事を書き漏らすのを恐れて世に出さずに地中に隠していた。慧立が臨終間際にその書物を取り出そうとしたが、取り出す前に亡くなってしまい、門人たちは悲嘆に暮れた。この書は他所に流散していたので、数年かけて捜し集めて買い戻した。門人たちはさらに彦悰に伝の続きを執筆するように請い、彦悰が十巻に増補したという。この本が世に出たのは、玄奘が遷化して二十余年の後、睿宗の垂拱四年（六八八）、既に高宗が他界し、武則天が実権を完全に掌握し、唐王朝の命運が風前の灯火となっていた時期

である。

慧立は隋の史官であった趙毅の息子であり、曲筆を嫌ったため、玄奘が国禁を破り密かに出国したこと、唐が滅ぼした高昌国の王と玄奘との親密な関係についても詳細に記している。これらが唐王朝の禁忌に触れるものであり、慧立が世に出すことを憚った主な理由であるとされる。

慧立の跡を継いで執筆した彦悰は、仏教を弾圧や迫害からの守護を使命とする護法僧として知られており、『護法沙門法琳別伝』三巻や『集沙門不応拝俗等事（沙門不敬録）』六巻などの著作がある。これら書物の特徴は、詔勅や上表文などの文書を多く収録していることである。

慧立が執筆したこの本の前半の西域・インド旅行記の部分は様々な仏教にまつわる神秘的な物語が多く、奇跡をしばしばおこす神聖な僧の興趣にあふれた伝記となっているのに対し、彦悰が増補した後半部は、玄奘自身が太宗・高宗との間でやりとりした美辞麗句の文章が多く収録されており、伝記というよりむしろ資料集のようであるのは彦悰の上記二著作と同じである。

読み物としては前半部の西域紀行の方が断然面白いであろう。しかし、神聖化された玄奘ではなく、玄奘自身の考えや心情を知るには、後半部分に多く収録された玄奘自身の撰した文章を読む方がよりその実像に迫れるのではないか。これらの文書を当時の歴史的文脈に基づきじっくり読みこんでみると、自身の目指した理想と現実との狭間で苦慮する生身の玄奘が浮かび上がってくる。

ここでは、その重要な事跡の一つとして、仏光王に関する記事をとりあげたい。仏光王とは、唐の中宗、すなわち高宗と武則天の息子李顕が、その出生時に授けられた号である。永徽六年（六五五）、高宗が太宗の旧臣たちの支持する王皇后を廃し、武氏を皇后に立てたことで、政治の実権を掌握していた太宗の旧臣たちの権威が動揺し始める。太宗はその晩年、玄奘を師として大変尊崇しており、玄奘は先帝の師として比類ない権勢を有していた。この機に乗じて、呂才という薬学・易学・暦学に通じ皇帝に側仕えしていた学者が、玄奘の弟子たちが撰した因明の注釈書を批判し、それまで自身が表に出ることのなかった玄奘が表に出て直接呂才と討論せざるを得なくなるという事件が起こった。この討論で呂才を打ち負かした玄奘に対し、高宗・武則天から使者が派遣され、高宗御筆の慈恩寺碑が立てられるなど、両者の関係が親密になる。そして、玄奘が西域行で得た持病が再発し危篤状態に陥った時、高宗は手厚い看病を行うよう命じ、回復後も宮殿に招

くなどする。そこで余命幾ばくもないことを悟った玄奘は、高宗・武后に対し大胆な要求を行う。その最たるものが、武后が懐妊した時、玄奘に安産祈願を依頼し、男子を出産したあかつきには、僧とするように高宗・武后に要望したことである。顕慶元年（六五六）武后が無事に男子を出産すると、この子に仏光王という号が与えられ、玄奘が剃髪の師となった。この時以降、一年の間に仏光王に関する玄奘と高宗とのやりとりが実に頻繁にかわされる。玄奘が仏光王に対して、仏教界の守護者として大変期待をかけ、仏光王のもとで唐王朝が仏教王国となることを夢見ていたと考えられる。

しかしながら、玄奘の夢はすぐに打ち砕かれた。翌年の顕慶二年（六五七）、高宗と武則天は洛陽へ行幸し、仏光王を周王に封じ、ここを東都と定めた。特に武后が彼に期待をかけていたのである。洛陽から長安に帰還して以降、仏光王に関する玄奘と高宗のやりとりは一切見えなくなり、玄奘の希望は結局かなわなかったことがわかる。この後、玄奘と高宗・武后との関係も冷めたものとなり、玄奘は都から遠く離れた玉華寺で示寂する。

さて、玄奘の死後、仏光王こと李顕は、数奇な運命をたどることになる。兄の太子李賢が廃されると太子に立てられ、高宗が崩ずると、武后によって皇帝に擁立された。しかし、韋皇后の父である韋玄貞を侍中に抜擢しようとして武后の怒りを買い、廃され廬陵王となり、均州、房州に監禁される。房州では死の影に怯え、いつも薬師如来を祈念していたという。その後、武則天が皇帝に即位すると、再び皇太子として呼び戻され、臣下のクーデターにより再び皇帝に立てられる。

二度目の即位後、宮中に蔵していた玄奘の画像を大慈恩寺の翻経堂に移して顕彰し、玄奘に「大遍覚」という諡号を授与した。また、仏光王の号にちなんで、長安・洛陽の宮城内にそれぞれ仏光寺（仏光殿）を建立する。さらに、その訳経事業に再び光をあて、玄奘が最後に訳に着手しようとして放棄した『宝積経』の翻訳事業を興し、仏光殿にて自ら筆受を担当した。中宗は幼いときに玄奘が示寂したので記憶はなかったかもしれないが、周りの者から玄奘の自身に対する期待をよく聞いていたし、『大慈恩寺三蔵法師伝』の仏光王の記述にも目を通していたのであろう。

帰国後の玄奘の境遇がいかに変化したかの詳細については、『アジア人物史第三巻　ユーラシア東西ふたつの帝国』集英社、二〇二三年に収録の拙著「玄奘――その理想と現実」をご参照いただきたい。

でたらめな「僕」の批評性

――安岡章太郎短篇作品の魅力

藤野志織

安岡章太郎（一九二〇―二〇一三）は、戦後に文壇に登場した作家である。思想や政治性の欠如、批評性の希薄さから、デビュー当初には揶揄を込めて「第三の新人」と呼ばれた。エッセイのほか、実体験に根差した小説を数多く執筆したことでも知られる。

夏期公開講座で取り上げた「勲章」（一九五三）は、安岡が一九四五年十二月より二か月間、マッカーサー司令部になった日比谷の第一生命ビルで掃除夫として働いた実体験を素材とする。小説は三部構成で、「僕」という一人称で語られる。「勲章」というタイトルから、占領下のGHQ庁舎で「僕」が大きな功績を挙げる、そんな物語を想像するかもしれない。しかし、そうではない。問題の勲章は第三章の後半でようやく登場する。「僕」が、父の勲章（ただし、父が無くしてしまったために買ってきた代替品であり、いわば偽物）と引き換えに、同庁舎に勤務するミッチェル伍長のパイプ・タバコをせしめるのである。その後偶然にもシガレットの配給が途絶え、ミッチェルがまったくタバコを吸えなくなってしまうという事態が発生する。これが物語の結末である。

確かにこの展開は、被支配者である「僕」が悪知恵を働かせて、支配者にあたるミッチェルに一杯喰わせた逆襲の物語とも読める。そして、その行為に対して勲章に値する価値を見出すことも可能かもしれない。しかし、物語を丁寧に読んでいくと、ここには物々交換による立場の逆転ではなく、むしろ不安定で交換可能なアイデンティティという主題が見出される。本作品の魅力の一つは、当時の社会が抱えていた支配／被支配の問題（アメリカ・日本・朝鮮）、アイデンティティの不安定さを緻密かつ明快な構成により浮き彫りにした点にある。

そしてこれらが、常に錯覚や獲得の失敗を通して象徴的に語られている点は注目に値する。安岡章太郎の批評性とは、どちらか一方の側に立ち、堅固な考えを主張することではない。本作品においては、一個の身体を持ちながらも、名前を持たない不安定な「僕」の視点を通して、読者は強者／弱者の一方に与することなく、フラットに世界を見つめることができる。これが安岡作品の持つ批評性なのである。

それでは、どのようにこうした読みが導かれるのか、鍵となる箇所を見てみよう。第一章のメインは、敗戦直前の「僕」の回想である。ある日「僕」はキセルを携えて「まったく空ッポ」の東京の町をさすらい歩く。「僕」の心情が乾いた透明性を持って記述される。本章における錯覚と獲得の失敗の対象はタバコである。「僕」は、「吸いがらの幽霊」を見る。紙の筒をタバコと見間違えてしまうこの出来事は、次の文章で閉じられる。「……僕はガッカリもしなければ、気恥ずかしいとも思わなかった。藁クズにだまかされた、ということがおかしくもなかった。……そんなに心が弱っていた。」これが第一の錯覚と獲得の失敗である。誰しも身に覚えのあるような他愛ない現象である。しかしそこに可笑しみも怒りも感じない、ここに戦争にすべてを吸い尽くされた空ッポの人間像があると言えるだろう。

そして第二章の舞台は戦後である。第二の錯覚と獲得の失敗は、二つの郊外電車の交叉するS駅で起こる。朝鮮人の少年が封を切ったアメリカ・タバコを「僕」に差し出す場面である。朝鮮の少年と「僕」の束の間の交歓は、しかし意外な結末を迎える。「僕」は自分のチェビオット格子の半マントを気に入って、少年が近づいてきたのだろうと推測していた。ところが実は、少年はそれ以上に「僕」を朝鮮人の同胞だと勘違いしたからこそ、貴重なタバコを分けてくれたのだった。これが第二の錯覚である。そしてこの事件によって、「僕」は過去の習慣にとらわれない新しい美意識を身につけた日本人としての自己像の獲得に失敗する。不安定なアイデンティティというテーマは、ここで顕在化する。

第三章は、GHQ庁舎が舞台である。「僕」は掃除夫の仕事につき、「自分自身の中身にゴミとホコリを一ぱいに詰めこむ」ことに大きな喜びを見出す。これは第一章と明確なコントラストを成している。次第に劣等感や屈辱感は完全に麻痺し、アメリカ兵から「ミッキー」とか「ジョオ」とか呼ばれてもよろこんで応じる。拙い英語で交わす彼らとの会話もでたらめな自己像を形成していくのみである。しかし「僕」に言わせれば、それは「嘘でもナンデモナイことだった。ただタバコが吸いたいという気持をのぞいては」。そしてこのタバコに対する底なしの欲望が、ミッチェル伍長のパイプ・タバコへと向けられるのである。

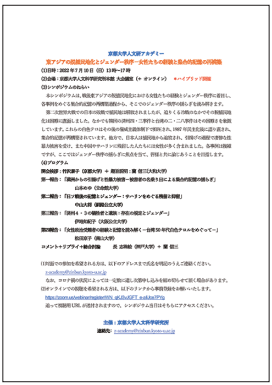
物語の結末については、すでに述べた。第三の錯覚と獲得の失敗は、勲章とパイプ・タバコの交換をめぐってなされる。内気な伍長は勲章の価値を見誤り、それと気付かず不当な取引に応じ、「僕」はまんまとパ

イプ・タバコを手にいれる。つまり獲得に失敗するのは「僕」ではないのだ。しかし伍長を惨めな立場に追いやっているのが、シガレットの一時的な配給停止という偶然である点を考え併せれば、看取すべきは、支配／被支配の劇的な逆転ではない。むしろ、いくらでもすり替え可能な「僕」という存在の可笑しみと不気味さなのである。安岡章太郎の作品には、不誠実で不安定な「僕」を中心に据えることで可能になる同時代への批評的な眼差しがある。それは敗戦を経て、自らの足場が突き崩された時代にやってきた、負の感情と弱さを抱え込んだ批評性なのである。

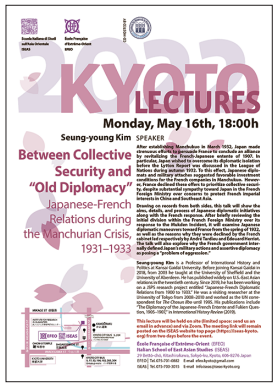
講演会　ポスターギャラリー　二〇二三

七月

四月

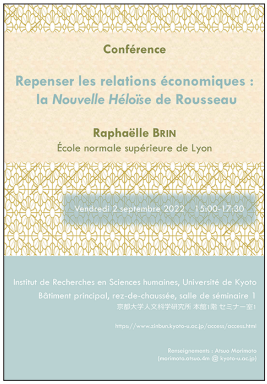


五月

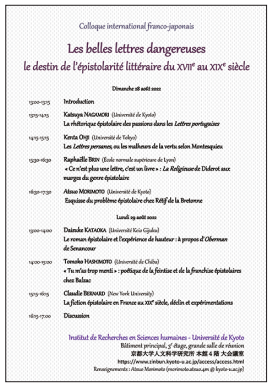


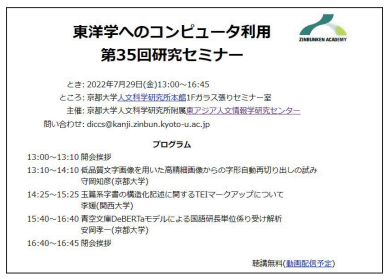
六月

九月



八月





東洋学へのコンピュータ利用
第35回研究セミナー

ZINBUNKEN ACADEMY

とき：2022年7月29日(金)13:00～16:45
ところ：京都大学人文科学研究所本館1Fガラス張りセミナー室
主催：京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター
問い合わせ：diccs@kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp

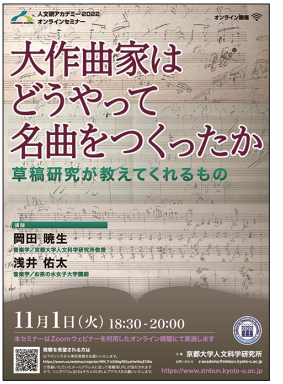
プログラム

13:00～13:10 開会挨拶
13:10～14:10 低品質文字画像を用いた高精細画像からの字形自動再切り出しの試み
守岡知彦(京都大学)
14:25～15:25 玉篇系字書の構造化記述に関するTEIマークアップについて
李媛(関西大学)
15:40～16:40 青空文庫DeBERTaモデルによる国語研長単位係り受け解析
安岡孝一(京都大学)
16:40～16:45 閉会挨拶

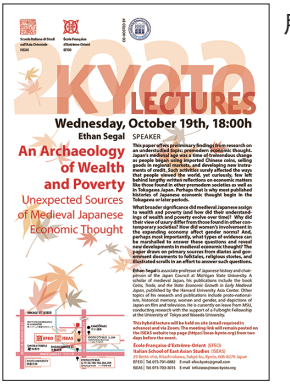
聴講無料(動画配信予定)

人文研アカデミー2022
オンライン シンポジウム
日本古代中世の仏像彫刻
―阿弥陀如来の変容をさぐる―
2022年12月4日［日］
13:30～17:30
オンライン開催
主催：京都大学人文科学研究所
お問い合わせ：j-academy@bun.kyoto-u.ac.jp
京都大学人文科学研究所

十一月


人文研アカデミー2022
オンラインセミナー
大作曲家は
どうやって
名曲をつくったか
草稿研究が教えてくれるもの
岡田 暁生
浅井 佑太
11月1日（火）18:30-20:00
オンライン開催
京都大学人文科学研究所
https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp

十月


KYOTO LECTURES
Wednesday, October 19th, 18:00
Ethan Segal
SPEAKER
An Archaeology of Wealth and Poverty
Unexpected Sources of Medieval Japanese Economic Thought

人文研アカデミー2022
オンラインシンポジウム
山に生きる
―なりわいと環境の歴史学
武井 弘一
岩城 卓二
2022年12月10日［土］
14:00～17:00
オンライン開催
京都大学人文科学研究所

KYOTO LECTURES
Wednesday, November 16th, 18:00
Olivier Ansart
SPEAKER
Ogyū Sorai's Political Theory Reconsidered
What, and Why?

感染症と近代社会
―ポスト・パンデミックの人文学にむけて
参加無料
令和4年10月28日(金)

Past, present and future of Asian lacquer: urushi from art to electronics
Date and venue of the event
December 12, 2022
Program

シンポジウム 記憶の存在論と歴史の地平III
Ontology of Memory and Horizon of History III
DEC. 3rd (Sat.) 2022
14:00-17:00 JTS
Program

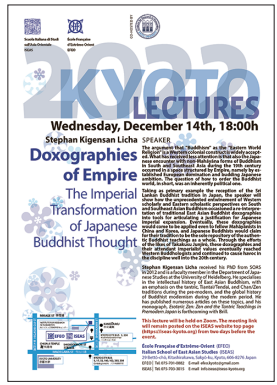
十二月

講演会 ローラ・喜納のアートとトーク
「ウチナーンチュのルーツを辿って」
日時：10月30日（日） 12：00-13：30
場所：沖縄県立博物館・美術館 博物館講座室

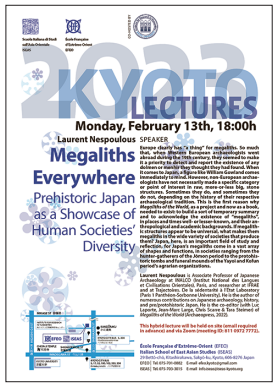
二月

Opening Address: Minoru INABA (Kyoto University)
Opening Remarks: Tomoko MORIKAWA (The University of Tokyo)
Tomoko MORIKAWA (The University of Tokyo) Artisans and Handicrafts of 19th century Isfahan
Susan ASILI (Tehran University) Women's Socio-economic position in the urban life of Tehran during the Qajar period
Ichiro OZAWA (Otsumeikan University) Cities and Settlements in Iranian Makran at the Turn of the 19th and 20th centuries
Takashi KURODA (Tohoku University) A Photo with Mirza 'Ali Asghar Khan Amin ad-Dawla in Iz. taken during his stay in Japan
Hashem RAJABZADE (Osaka University) Urban Landscape of Iran as described in Masahiru Yoshida's Travelogue (1869-1881)
Naofumi ABE(Chukyo University) Social Structures of the Tabriz Urban Quarters in the Nasseri Era
Anja PISTOR-HATAMIKIA(University of Landscapes of Constitutionalism in Tehran
Nobuaki KONDO (Tokyo University for Foreign Studies) Between Cities and Villages
General Discussion
Closing Remarks: Tomoko Morikawa
C01-Research Group 05 37th Workshop
Qajar Round Table: Urban Landscapes in Qajar Iran
2/20(日)
10:00am-18:00pm
京都大学人文科学研究所 4 階大会議室
Institute for Research in Humanities, Kyoto University

人文研アカデミー 2022
シンポジウム
近現代天皇制を考える学術集会
——「建国記念の日」に問う
2023年
2月11日(土)
13:00~18:30
対面にて開催
京都大学 工学部
総合研究4号館
井上泰1講義室
京都大学人文科学研究所
https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp


2022 KYOTO LECTURES
Wednesday, December 14th, 18:00
Stephan Kigensan Licha
Doxographies of Empire
The Imperial Transformation of Japanese Buddhist Thought
Ecole Française d'Extrême-Orient (EFEO)
Italian School of East Asian Studies (ISEAO)

第9回シンポジウム
プラネタリウムとコンピュータによる人文学研究
イメージ・ビジュアル・ヒストリー
インド宗教文化における「循環」の思想と表象
2/21
京都大学人文科学研究所


2022 KYOTO LECTURES
Monday, February 13th, 18:00
Laurent Nespoulous
Megaliths Everywhere
Prehistoric Japan as a Showcase of Human Societies' Diversity
Ecole Française d'Extrême-Orient (EFEO)
Italian School of East Asian Studies (ISEAO)

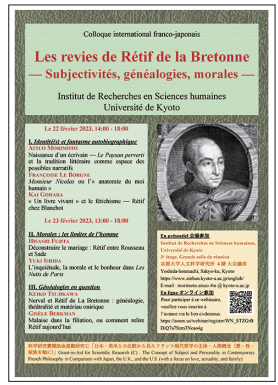
一月

講演会／Conférence
戦争とは何か？
ルソーによる国家とその紛争性
Qu'est-ce que la guerre ? État et conflictualité selon Rousseau
フロラン・ゲナール
Florent Guénard
2023年1月17日 17時～19時／Le 17 janvier 2023, 17h - 19h
京都大学人文科学研究所 本館
Institut de Recherches en Sciences humaines, Université de Kyoto
セミナー室1（1階）／Salle de séminaire 1 (rez-de-chaussée)
フランス語・通訳あり／en français avec traduction

計画研究 05「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」第 36 回研究会
18 February 2023, Sat. 15:00-18:00
京都大学人文科学研究所セミナー室4（5階）
Institute for Research in Humanities, Kyoto University
Opening Address:
Minoru INABA 稲葉穣 (Director of Institute for Research in Humanities)
15:10-16:25
Vanessa Van RENTERGHEM (INALCO)
"Urban Structure and Urban Change in Seljuq Baghdad"
16:45-18:00
Anja PISTOR-HATAM (Kiel University)
"Tehran at the Transition from the Qajars to the Pahlavis: Modernization and the History of Everyday Life"
司会：Tomoko MORIKAWA 森川知子 (The University of Tokyo)
* 参加無料、事前申込不要
Organized by C01-Research Group 05: Historical research on the urban structure of West Asian "Islamic cities" (MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas: "The Essence of Urban Civilization")

2022 KYOTO LECTURES
Tuesday, January 24th, 18:00
Stephen Dodd
The Politics of Flying Saucers in Yukio Mishima's Beautiful Star
Ecole Française d'Extrême-Orient (EFEO)
Italian School of East Asian Studies (ISEAO)

KYOTO LECTURES
Wednesday, March 15th, 18:00
Elizabeth Emery
SPEAKER
Reframing Japonisme
Women's Engagement with Japanese Art in 19th-Century France


Colloque international franco-japonais
Les revies de Rétif de la Bretonne
— Subjectivités, généalogies, morales —
Institut de Recherches en Sciences humaines
Université de Kyoto

三月

漢籍の旅路2
遥かな日本への旅路
第18回京都大学人文科学研究所 TOKYO漢籍セミナー
海を越えた仏書と漢籍
矢木 毅
行きて帰りし書物
赤井知之
蔣四と海豚の「王冶梁」
2023年3月6日(月)
京都大学人文科学研究所

京都大学人文科学研究所退職記念講演会
竹沢泰子 教授
人間の分類と差別
岡村秀典 教授
古代中国
2023年3月11日(土)
13:30～18:30
聴講無料
2023年3月16日(木)
14:00～15:30
聴講無料

彙　報〈二〇二二年四月より二〇二三年三月まで〉

おくりもの

。平岡隆二准教授は第一六回日本科学史学会論文賞を受賞（二〇二二年五月二八日）

。楊維公助教は、第三二回蘆北賞奨励賞を受賞（二〇二二年十二月一日）

。酒井朋子准教授は、第一五回京都大学優秀女性研究者奨励賞を受賞（二〇二三年三月六日）

人のうごき

。稲葉穣教授（東方学研究部）を当研究所長に併任（二〇二一年四月一日～二〇二三年三月三一日）

。岩城卓二教授（人文学研究部）を副所長に併任（二〇二一年四月一日～二〇二三年三月三一日）

。池田巧教授（東方学研究部）を副所長に併任（二〇二一年四月一日～二〇二三年三月三一日）

。池田巧教授（東方学研究部）を附属東アジア人文情報学研究センター長に併任（二〇二二年四月一日～二〇二三年三月三一日）

。石川禎浩教授（東方学研究部）を附属現代中国研究センター長に併任（二〇二二年四月一日～二〇二三年三月三一日）

。酒井朋子は、准教授（人文学研究部）に採用（二〇二二年四月一日付）。

。金智慧は、助教（人文学研究部）に採用（二〇二二年四月一日付）。

。佐藤淳二は、教授（人文学研究部）に配置換（二〇二二年四月一日付）。

。高階絵里加教授は、地球環境学堂に配置換（二〇二二年四月一日付）。

。福谷彬助教（東方学研究部）は、人間・環境学研究科に配置換（二〇二二年四月一日付）。

。冨山一郎は、客員教授（文化研究創成研究部門、二〇二二年四月一日～二〇二五年三月三一日）

。NOGUEIRA RAMOS, Martinは、客員准教授（文化研究創成研究部門、二〇二二年四月一日～二〇二二年八月三一日）。

。VITTA, Silvio京都外国語大学教授は、特任教授（二〇二二年四月一日～二〇二三年三月三一日）。

。MARQUET, Christoph Michelは、特任教授（二〇二二年五月一日～二〇二三年三月三一日）。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、定年により退職（二〇二三年三月三一日付）

。岡村秀典教授（東方学研究部）は、定年により退職（二〇二三年三月三一日付）

。守岡知彦助教（東方学研究部）は、退職（二〇二三年三月三一日付）

海外での研究活動

。中西竜也准教授（東方学研究部）は、二〇二一年九月二八日成田発、ハーバード燕京研究所においてvisiting scholarとして科研費課題にかかる中国ムスリム研究を行い、二〇二二年六月二日帰国。

。FORTE, Erika 教授（東方学研究部）
は、二〇二二年八月四日大阪発、ウィーン大学において科研費課題にかかる作業・研究打ち合わせを行い、ローマ・ラ・サピエンツァ大学において科研費課題にかかる情報収集・研究打ち合わせを行い、二〇二二年九月二三日帰国。

招へい研究員

。林　立萍　台湾大学日本語文学科教授
外の視点から京ことばの特徴を考える
（文化連関研究客員部門）
受入教員　岩城教授
期間　二〇二二年四月一日～二〇二二年九月三十日
。YI, Lidu　フロリダ国際大学准教授
三～六世紀シルクロードの仏教伝播における宗教的実践と儀礼
（文化生成研究客員部門）
受入教員　向井准教授
期間　二〇二二年五月一日～二〇二二年七月三一日
。馮　継仁　ハワイ大学ヒロ校准教授
『営造法式』の文献学研究
（文化生成研究客員部門）
受入教員　古松教授
期間　二〇二二年七月六日～二〇二二年十月五日
。CHRISTY, Alan Scott　カリフォルニア大学サンタクルーズ校准教授
八重山戦争マラリア：帝国主義、科学と記憶のポリティクス
（文化生成研究客員部門）
受入教員　直野准教授
期間　二〇二二年十月一日～二〇二二年十二月三一日
。張　曦　中央民族大学民俗学與社会学学院文化人類学教授
自然災害と文化の繼承に関する中日比較研究
（文化連関研究客員部門）
受入教員　池田教授
期間　二〇二二年十月一日～二〇二二年十二月三一日

招へい外国人学者

。HUBBARD, James Bert　スミス大学教授
中国・日本仏教文献／仏教と脳科学に関する研究
受入教員　Wittern 教授
期間　二〇二一年十月一日～二〇二三年九月三十日
。Duojiecaidan　青海民族大学准教授
日本におけるチベット学と西域研究の展開―宗教哲学と仏教文化を中心に―
受入教員　池田教授
期間　二〇二二年二月十日～二〇二二年七月二六日
。張　利軍　東北師範大学歴史文化学院副教授
夏商周国家構造の考古学研究
受入教員　岡村教授
期間　二〇二二年六月十三日～二〇二三年四月二六日
。高　婧聡　東北師範大学歴史文化学院副教授
西周時代の国家構造とその歴史的影響
受入教員　岡村教授
期間　二〇二二年六月十三日～二〇二三年四月二六日
。李　乃琦　中国浙江大学文学部准教授
玄応「一切経音義」写本文献整理集成

と言語研究
受入教員　船山教授
期間　二〇二二年六月二十日～二〇二三年一月二十日

。YI, Lidu　フロリダ国際大学准教授
三～六世紀シルクロードを介した仏教伝播についての美術考古学的研究
受入教員　向井准教授
期間　二〇二二年八月一日～二〇二二年九月七日

。BEHR, Wolfgang
上古中国語における放浪語
受入教員　野原准教授
期間　二〇二二年九月一日～二〇二二年十二月三一日

。李　皓　東北師範大学歴史文化学院副教授
辛亥革命期の中国東北辺境政局に対する日本の対応
受入教員　石川教授
期間　二〇二二年十月二四日～二〇二三年十月十四日

。楊　奎松　華東師範大学中国当代史研究センター主任
一九四九年以前の毛沢東の前半生とその思想についての考証
受入教員　石川教授
期間　二〇二三年一月一日～二〇二三年十二月三一日

。崔　善娥　明知大學校教授
九世紀東アジアにおける仏教美術の研究
受入教員　稲本教授
期間　二〇二三年一月三十日～二〇二三年二月二四日

。KATA, Prachatip　カセサート大学講師
The living with deteriorated soil: The transformative ethics in troubled naturecultural worlds
受入教員　酒井准教授
期間　二〇二三年三月二五日～二〇二三年四月二七日

外国人共同研究者

。易　丹韵　早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程
仏教宇宙観の中国的展開に関する研究―五～十三世紀の「世界図」制作を手掛かりに―
受入教員　倉本准教授
期間　二〇二一年五月六日～二〇二二年八月十七日

。蔡　長廷　国立聯合大学通識教育中心兼任助理教授
日本における征服王朝論の発展とその後
受入教員　古松教授
期間　二〇二二年三月八日～二〇二三年三月七日

。趙　一水　高麗大学民族文化研究院訪問学者
近世朝鮮及び清朝の政治的言説における日本
受入教員　矢木教授
期間　二〇二二年四月六日～二〇二三年四月五日

。胡　頎　台湾大学中国文学研究所博士候選人
南北朝時代における国家意識の構築とその表象――外交使節・活動を中心に
受入教員　永田准教授
期間　二〇二二年四月二二日～二〇二三年四月二一日

◦Elia Weber　ベルリン自由大学修士課程
Indo-Iranian animal sacrifice（インド・イランの動物供犠）
受入教員　石井准教授
期間　二〇二二年六月九日～二〇二二年八月十一日
◦Baoli Yang　ブラウン大学 Ph. D. candidate
唐代仏教とシルクロードの観光文化
受入教員　倉本准教授
期間　二〇二二年七月四日～二〇二二年八月一日
◦楊　翊　ハーバード大学博士後期課程
叙述史学から分析史学へ：唐宋時代の史学の転換
受入教員　古松教授
期間　二〇二二年八月二一日～二〇二三年八月二十日
◦BROWNING, Jason　インディアナ大学ブルーミントン校博士課程
Early Medieval Central Asian Buddhist Philosophy as Reflected in Early Japanese and Islamic Scholastic Traditions: Examining the Transmission of the Doctrine of Momentariness
受入教員　中西准教授
期間　二〇二二年八月二二日～二〇二三年八月二一日
◦劉　素桂　蘭州大学外国語学院副教授
近代日本人による中国文化財調査
受入教員　向井准教授
期間　二〇二二年十二月二日～二〇二三年十一月三十日
◦郭　珮君
日本中世の仏教願文における神国と仏国
受入教員　倉本准教授
期間　二〇二三年二月一日～二〇二三年七月三一日

外国人研究生

◦石垣　章子
漢訳仏典として位置付けられた疑偽経典の成立と思想の系譜
受入教員　船山教授
期間　二〇一八年四月一日～二〇二四年三月三一日
◦Pelayo Prieto, Miguel Angel
和食前の日本料理。中世・近世日本料理への新しいアプローチ。
受入教員　藤原准教授
期間　二〇二一年四月一日～二〇二三年三月三一日
◦Depairon, Philippe
Representations of Memories of Traumatic Events in Contemporary Japan
受入教員　直野准教授
期間　二〇二二年四月一日～二〇二四年九月三十日
◦荘　帆
京都における羅振玉の生活と思想
受入教員　石川教授
期間　二〇二二年四月一日～二〇二三年七月三十日
◦丁　麗瓊
感情史の視点から見る日中戦争時期の中国共産党新聞宣伝史の研究（十九三十一九四五）
受入教員　石川教授
期間　二〇二二年五月一日～二〇二三年四月三十日
◦沈　佳穎

海洋における帝国―日本帝国海洋主権の形成
受入教員　福家准教授
期間　二〇二二年六月一日～二〇二三年三月三一日

。Nathaniel Lovdahl
唐と宋王朝の仏教受戒歴史
受入教員　船山教授
期間　二〇二二年六月一日～二〇二四年三月三一日

。Kirill Kartashov
一八八〇～一九五〇年代日本における除虫菊の歴史
受入教員　瀬戸口准教授
期間　二〇二二年六月一日～二〇二二年十一月三十日

。申　晴
清末以降の幣制改革
受入教員　村上准教授
期間　二〇二二年九月一日～二〇二三年八月十九日

。黄　蓉
唐・宋・西夏時代における漢、チベットの薬師仏図像とその信仰に関する研究
受入教員　稲本教授
期間　二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三十日

。姜　伊
漢唐時期における天象図の変遷についての考古学的研究
受入教員　向井准教授
期間　二〇二二年十月一日～二〇二三年九月三十日

。李　瀾
唐代の石刻造像銘と中国仏教実践（Stone Inscriptions and Chinese Buddhist Practices in the Tang Dynasty）
受入教員　倉本准教授
期間　二〇二三年一月一日～二〇二四年三月三一日

東アジア人文情報学研究センター講習会

。二〇二二年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（十月三日）
開講挨拶・オリエンテーション　池田　巧
漢籍について（四部分類概説を含む）　永田　知之
カードの取り方――漢籍整理の実践　楊　維公

第二日（十月四日）
工具書について　高井たかね
漢籍関連サイトの利用　Wittern, Christian
実習を始めるにあたって　永田　知之
漢籍目録カード作成実習
第三日（十月五日）
目録検索とデータベース検索　安岡　孝一
漢籍データ入力実習（一）
第四日（十月六日）
和刻本について（大学院文学研究科教授）　宇佐美　文理
漢籍データ入力実習（二）
第五日（十月七日）
朝鮮本について　矢木　毅
実習解説　楊　維公
情報交換　安岡　孝一
終了挨拶　池田　巧

。二〇二二年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月七日）
開講挨拶・オリエンテーション　池田　巧
経部について　古勝　隆一
叢書部について　藤井　律之
叢書と漢籍データベース　安岡　孝一
第二日（十一月八日）
史部について　古松　崇志
漢籍データ入力実習（一）
第三日（十一月九日）
子部について　稲本　泰生
漢籍データ入力実習（二）
第四日（十一月十日）
集部について（大学院人間・環境学研究科教授）　道坂　昭廣
漢籍データ入力実習（三）
第五日（十一月十一日）
漢籍と情報処理　Wittern, Christian
実習解説　楊　維公
情報交換　安岡　孝一
終了挨拶　池田　巧

火中の栗を拾う

――京大人文研で「日本の伝統文化」を問い直すということ――

菊地　暁

火中の栗を拾うような研究班だ。末席を汚して勉強させてもらおうと共同研究「「日本の伝統文化」を問い直す」班のお誘いを快諾したところ、思いがけず副班長をお引き受けすることとなり、遅まきながら課題の難儀さに気づいた。呆然となった。

というのは、何をどう論じたところで必ず異論反論がつきまとうのが「伝統」であるからだ。「伝統」は、それを語る人にとっては自明で確固たる存在なのだが、じつのところ、語り手の価値判断と対象選択を避けられない。それゆえ、「伝統」は、それがいかに古き良き「過去」に基づくものとして観念されようとも、本質的にはそれを語る「現在」に属する事象であり、その語りの対象とされた出来事としての「過去」との間には必然的に齟齬が生まれる。『創られた伝統』（ホブズボウム＆レンジャー編、一九八三）をはじめとする多くの研究がこのアポリアを論じてきたわけで、その成果を認識した上で、新たなる「伝統」研究が実践されなければならない。

さて、どうしたものか。もっとも簡便なのは、「伝統」という必然的に誤解を招く言葉の使用を避けて、対象となる地域や時代やジャンルを個別具体的に論じていくことかと思われるが（そしてそのようにして各人の守備範囲を確認していくことは大切だと思われるが）、「「日本の伝統文化」を問い直す」という御題を掲げてしまった以上、それでは済まされないような気がしないではない。日本列島で生起した文化事象に関わるのであれば、何をやっても、それなりに「日本の伝統文化」を問い直したことにはなるのだろう。だが、何をどこまでやれば、「問い直し」を達成したと言い得るのだろうか。共同研究という期間を限定されたプロジェクトとしては、甚だ厄介というのが偽らざる本音だった。

誤解のないように言っておくと、班員諸氏による研究報告は、それぞれ充実した興味深いものばかりだった。個人的に印象に残ったものを二、三挙げると（以下、不正確な紹介となることのご寛恕を乞う）、室町時代、中国から直輸入された禅信仰とそれにともなうライフスタイルが、南禅寺から東福寺へと連なる東山

の禅宗寺院群で展開された様子を「一種のチャイナタウン」と評されたのは、中世京都のイメージを刷新するユニークな視点だったし（禅仏教史・西谷功氏報告）、朝廷の一機関たる大学寮で孔子を祀る「釋奠」執行する際、供物として猪肉を献ずるか否か、天照大神を頂点とする神道祭祀との整合性が問われるという出来事の検証は、儒仏神が錯綜する中世的コスモロジーの奇怪さを鮮やかに照らし出し（中国思想史・水口拓寿氏報告）、そして、現存する古書籍の綿密な精査によって、巻子状の絵巻物から冊子状の絵草紙へと「絵のある物語」の媒体が交代するプロセスが跡付けられたことは、室町後期の社会変容が同時にメディア変容でもあったことを説得的に浮かび上がらせた（日本書物史・佐々木孝浩氏報告）。いずれも、「日本の伝統文化」を問い直す、貴重な貢献だったことは間違いない。

にもかかわらず、だ。こうした知見の蓄積を踏まえて「日本の伝統文化」の全体像を描き直すことは、今も未完の課題である。部分の更新は自動的には全体の更新を導かない。誰かが火中の栗を拾う覚悟でその作業に着手しない限り、旧態依然とした（そして実証的に問題のある）「日本の伝統文化」像が、相変わらず跋扈し続けることになるだろう。

閑話休題。

今日、「失われた三〇年」の停滞に相反するように「日本スゴイ系」と称される自画自賛コンテンツが大活躍だ。本当にスゴいなら自分で言わなくとも良いだろうに、わざわざ自分で言わなければ気がすまない人が後を絶たず、そしてそのオーディエンスが巷にあふれている。いわゆる「日本の伝統文化」も、都合よくその素材に活用され続けるのだろう。暗澹たる気分にさせられる。

唐突かもしれないが、戦時中の「日本スゴイ系」を乗り越えた桑原武夫の感慨は、一つのヒントになるかもしれない。

私は戦争に抵抗などという立派なことは何一つしなかったが、便乗はせずにすんだ。せずにすんだなどと変な言い方をするのは、私が無名で相手にされなかったことをさすが、同時に、京都の老先生たちの感化もあると思うからだ。よくお目にかかったのは、口をひらけば中国文化の偉大さを説かれる狩野直喜先生くらいだが、原勝郎、内藤湖南、内田銀蔵、喜田貞吉などという人々の本を戦争のころ楽しみによく読んだ。紀元二千六百年などというのは全くのうそで、桓武天皇の祖母は朝鮮人、伊勢神宮は大小

便の神様、というようなことが頭にのこっていては、あの時勢の風潮には乗りかねるのだった。専門の学問領域ではその後どういうことになっているのか知らないが、たとえこれらの先生たちの説が打破されたにしても、ああいう大胆な問題の立て方と精密な推し進め方、それのできた明治の学者は大したものだと、私は少年時代の印象を再確認した（桑原武夫「榊亮三郎先生のこと」『桑原武夫集　四』岩波書店、一九八〇、二二頁）。

二〇二三年、戦火止まぬ世界の中で「日本の伝統文化」と問い直すことの意味を、いま一度考えなければなるまい。

研究班を終えて

竹　元　規　人

研究班「清代～近代における経学の断絶と連続：目録学の視角から」は二〇二〇年四月に始まり、この三月に終了した。その第一の任務は、「『文史通義』班」（古勝隆一班長）において二〇一五年から取り組まれてきた『文史通義』内篇の会読を継続し、訳注の作成と刊行を完結させることであった。先日、『東方学報』第九十七冊に内篇五の訳注を掲載して、この仕事はひとまず終えることができた。

研究班での検討を通じて得られた章学誠の学問と思想に関する見解は、研究論集『章学誠の可能性』ほかで示す予定である。いま筆者個人の認識をごく簡潔に述べると、章は文献の系統的な再定位を通して、中国の学術の全体的把握を追求していたように思われた。それが、章が目録学を基礎としたことの意味であった。『文史通義』は体系的な史学方法論の書ではなく、書名の通り、「文史」の通義であったのである。それは、あえて現在の言葉に置き換えるならば、「人文学通論」とでも言い得るものであったように思われる（その「通論」に強固に通底したのが歴史的視座であった、とも言えるが、この問題は別途詳論を要する）。

『文史通義』は「易教」篇から始まり、その冒頭に有名な「六経皆史」が出てくる。その後「書教」篇、「詩教」篇、「経解」篇と、儒教経書に即した篇が続く。中国前近代の学問の中心は経学、書物の中心は経書であり、『文史通義』の構成もその前提に則っていると

言える。では章学誠の、学術の淵源と展開を跡づけ、学術を分類しながらその統一的把握を図るという、目録学の立場を援用すれば、経学は清代から近代にかけて、どのように展開したと考えられるだろうか。また、章学誠への認識・評価など、近代以来構築されてきた清代学術思想史は、どのように再考されうるだろうか。こういった問題を考察するのが、本研究班のテーマであった。

このテーマに関し、この三月に人文研分館大会議室において、国際ワークショップ「中国近代における経書の受容と変容」を開催することができた。タイトルを「経学」とせず「経書」としたのは、章学誠が「原道中」篇で「道は器を離れず（形而上の道は具体的な事物を離れることはない）」と述べたのに倣って、「学は書を離れず」と考えたからである。もっとも、出土資料や中国の外の文献など、中国における学問の対象は従来の目録学の範囲を超え、垂直・水平方向に空間的拡大を遂げていくことになるが、それは章学誠以後のことである。ワークショップは討論も盛り上がり、手前味噌ながら大変有意義なものとなったように思われた。会場の熱量がZoomでの参加者にどの程度共有できていたのか把握し難いのは、ハイブリッド方式の課題と思われる。

折しも感染症法上の五類化を見据え、年度末から各方面でのコロナ以前への復帰が進行しており、今回の研究班は結局covid-19とともに終始したものと言える。特に最初の二年間はその影響が強く、研究班開始から半年は完全遠隔での進行を余儀なくされ、二〇二〇年十月に一旦ハイブリッド方式を実現したものの、感染拡大によってまた遠隔に戻さざるを得なくなった。国外からの研究者の招聘が極めて困難となったのは、大きな損失だった。

ただ悪いことばかりではなく、遠隔会議が一般化したことにより、遠く離れた場所に所在する研究者と会話する（リアルタイムで通信する）ことのハードルが下がったと言える。これは、国内外各地の研究者にご参加いただいた本研究班にとっては利点となった。そしてそうとは言いながら、遠隔会議が日常化したがゆえに、かえって対面会議の有難味も、改めて認識することができた。

最後に話題はやはり会読に戻る。二〇一五年に「『文史通義』班」に参加させていただいた当初、自分で予習はするものの、研究班の場で改めて精読し、衆知を結集することによって、新たな読みと理解が生成される、その体験の鮮烈さを、今でも如実に記憶している。書名は広く知られているが十分読まれていると

は言い難い『文史通義』内篇の訳注が、人文研の研究班において作成されたのは、章の言葉を借りれば、「理勢の自然」（「原道上」篇）であったと思われる。個人的感慨で恐縮だが、こうした場に八年間、福岡から通い続けることができたのは、大いなる幸運であった。このような機会を与えられた人文科学研究所、そして二〇一五年に研究班にお声がけいただいてから本研究班で副班長としてご指導いただくまで、お世話になり続けている古勝隆一先生には、改めて深く感謝申し上げたい。また、研究班で様々にご示教いただいた先生方にも、この場を借りて御礼申し上げたい。

現在世上では「対話型ＡＩ」の衝撃が取り沙汰されているが、ＡＩが章学誠のテクストを見事に解釈訳読する事態はなお想像し難く、たとえその日が来たとしても、人間は古典を読み続けるであろう。会読万歳、会読よ永遠なれ、である。

途上の実験的プロジェクト、「実験性の生態学」

石井美保

二〇二〇年の四月から三年間、「実験性の生態学――人新世における多種共生関係に関する比較研究」と題した共同研究を行ってきた。研究班長は大阪大学人間科学研究科に所属する医療人類学者、モハーチゲルゲイさん。メンバーには文化人類学、科学技術社会論、科学史を専門とする研究者たちが集まった。

この共同研究のキーワードは、タイトルにも含まれている「実験性（experimentality）」という言葉である。実験性とは何か。この研究班で扱われる「実験」とは、たとえば顕微鏡やビーカーなどの器具を用いて実験室内で行われるようなものだけではない。そうした従来の実験のイメージには当てはまらないような、しかしそれでいて「実験」としか呼ぶことのできないような現象が、現代社会には溢れている。たとえば新薬の臨床試験や遺伝子組換え作物の試験栽培などにみられるように、一部の科学実験は実験室内にとどまる

ことなく、社会それ自体を実験の現場（「実験場」）にしてしまっている。またそのとき、社会の成員は自分が被験者であると特に意識することなく、いつのまにか実験に参加しているという事態が生じている。この共同研究班では、このように科学的な実験が限定された時空間から社会全体へと拡がっていくという展開そのものを「実験性」と名づけて検討することを試みた。

実験性を帯びたさまざまな試行や実践を通して、人と人、人と動植物、人とモノの関係性はそのつど再編され、新たな相互作用が生みだされていく。そのミクロな過程を民族誌的に記述すると同時に、複数の実験場のあり方を比較研究することが、この共同研究班の主な目的のひとつだった。またそれだけではなく、さまざまな実験場の創造と発展を可能としている経済とポリティクス、理念と情動がどのようなものであり、それらがどのように絡み合っているのかを明らかにすることを通して、現代社会における人間と環境の関係を批判的に見直すとともに、多種間の新たな共生の可能性を見出すことが、本研究班のより大きな目的でもあった。このような視座は、本研究所において過去に実施された三つの共同研究班、すなわち、「環境インフラストラクチャー――自然、テクノロジー、環境変動に関する比較研究」（二〇一三―二〇一六）、「環世界の人文学――生きもの・なりわい・わざ」（二〇一五―二〇一七）、そして「生と創造の探究――環世界の人文学」（二〇一七―二〇二〇）において提起された視点や問題意識と重なる面をもつ。

これらの目的の下に、この研究班では各班員の関心に合わせて七つのトピックを設定した。一、代謝と共生。二、環境デザインと市民参加。三、実験室とフィールドワーク。四、野生生物保護。五、発酵の実験性。六、脱植民地化の政治。七、実験的民族誌の作成。

各回の研究会では、これらの問題設定に基づく班員の研究発表に加えて、海外からの研究者を招いて数回の国際シンポジウム（Experimental Ecologies: Case Studies from Amazonia and Japan、ならびにEcologies of Experimentality: A Comparative Approach to Multispecies Coexistence in the Anthropocene 1, 2）を開催した。

これらの研究会でしばしば議論の的になったのは、実のところ「実験性」とは何なのか、という問題である。従来の実験室型の実験ではなく、社会に開かれ、なおかつ人間以外の存在をも含む実験的な実践は多岐にわたっており、それらに統一的な定義を与えることは難しい。多くの事例を検討する中で、実験性という概念に付随するキーワードとして偶然性、予測不可能

性、創発といった言葉が浮上してきたが、いずれも実験性という概念の定義を容易にするものではない。さらに、実験性を特徴とする諸現象を追いかける研究とその記述もまた、ある対象を外部から観察して記録するのではなく、当の現象に巻き込まれながら記述していくという実験的な方法をとらざるを得ない。だとすれば、この研究班において「実験性とは何か」という議論に決着がつかなかったことは問題ではなく、むしろそのように鍵となる概念も記述の方法も、研究の対象さえも完全には枠づけられないということこそがこのプロジェクトの特徴であり、醍醐味だったといえるかもしれない。

とはいえ、実験性について実際に調査研究を進めていく上では、やはりつぎのような問いにぶつからざるを得ない。いつ、誰が、どのようにしてある現象を「実験」と名指すことができるのか。社会全体に拡張された実験の外縁は、どのように設定されうるのか。ある時点で「実験」と名付けられた現象の多面性や複数性を、どのように捉え、記述することができるのか。

現時点で、これらの問いに明確な答えは出ていない。短い研究期間では論じ尽くせなかった問いや課題はいまだに山積しており、何を議論すべきかがようやく見えてきたところで時間切れになってしまったという感も否めない。ただ言えることは、私たちは誰もが否応なく同時代的な実験性の中に巻き込まれているということだ。そのエコロジーを、外側から描くことはできない。

オンライン会読・アラビア語検索・翻訳

稲葉　穣

共同研究「内陸アジアとその隣接地域の社会と文化」は予定の三年を一年延長し、二〇二二年度末で無事（？）終了を迎えた。スタートしたのが二〇一九年の春で、当初の予定通りどうにか進んだのは一年ほど、その後はコロナ禍の影響をもろに被ることとなった。もともとこの研究班も、あるいはそれに先立つ研究会も、研究報告と史料会読を半々くらいの割合で行っていたのだが、パンデミックの下、実際に集まって研究報告の会を開くのは不可能となった。オンラインでの研究報告の会も試してはみたのだが、どうも班長である私自身が（極めて注意力散漫のゆえ）オンラインで

発表や報告を聞くのが苦手であるということもあって、二〇二〇年春以降はほとんどの研究会を史料会読にあてることとした。

史料会読自体、コロナ前の二〇一九年度からすでに開始していたのだが、題材は、西暦一二世紀に書かれたと覚しい、アフガニスタンのヘラートに関するペルシア語地方史の手写本である。この写本は二〇〇六年頃にイランのヤズドの古物商の店頭で発見されたと言われるが、首尾を欠いており、誰の作かは正確にはわからない（一応、ヘラートの地方史の著者として後代の書録に名の見えるアブドゥッラフマーン・ファーミー作と見なされている）。写本自体はおそらく一三世紀頃に書写されたものだと想定されるが、書写生はあまり優秀でも注意深くもなかったようで、書写間違いが各所に見られる。それでも文字は鮮明であり、読み取りに苦労する部分はさほど多くはなかった。そうしてこの写本会読という作業に、オンライン会議環境はずいぶんと上手くハマったと自分では思っている。画面共有機能を使って問題の箇所を（時には大きく拡大して）示し、アラビア文字の点の有無、ストロークの長さなどを一緒に検討できる。多くのメンバーが自分の研究室や書斎から参加していたため、議論の流れに応じて関連する資料を自分の本棚からヒョイと取り出しては示してくれるし、重たい辞書類も使い放題であった。特に後者は、メンバーが一堂に会して行う読書会ではなかなか実現できない状況であり、おそらく今後も史料会読に関してはオンライン研究会というのは有力な選択肢であり続けるのだろう。

この地方史写本には随所にアラビア語の詩がひかれていて、そのほぼ全てにペルシア語の訳が付されている。写本を出版した編者たちはそこから、この書物のオリジナルはアラビア語で、それがペルシア語に翻訳されたのかもしれないとも想定している。その当否は我々には判じがたいが、このアラビア語詩はなかなかの難物であった。中国古典籍ほどではないが、アラビア文字のものも二一世紀に入ってからはテキスト検索が随分と可能となっていて、オンラインでもいろんなものがヒットする。ただ古いアラビア語の詩は引用の過程で多くのヴァリアントが生じていて割と手強いことが多い。そこで班員諸氏は、自らの経験と勘を駆使していろんな形を想定して検索し、時にドンピシャのもの、あるいはそこそこ近いものを見つけ、文脈を補って解釈しようと試みる。もちろん韻律も重要で、アラビア語史料に熟達した班員の存在は大変ありがたかった。

右に書いたようにペルシア語の訳があるのだから、

随分と助けになるのではないか、と我々も最初は甘い見通しを持っていたのだが、またまた厄介なことに我々の解釈するアラビア語とペルシア語訳がうまく合致してくれない。ペルシア語訳も詩の形になっているので、当然韻律を考慮して意味を解釈するのだが、アラビア語の方と四五度くらい意味がズレている場合もあれば、全くと言っていいほど違っている場合もあって頭を抱えることが多かった。しかしこの、我々から見れば下手な翻訳であったり、訳し間違いに見えるものもまた、立派な歴史表象であることに徐々に気づいてきた。ズレや間違いの原因は、右にも書いた書写生の能力不足のせいかもしれないし、編者達が想定するペルシア語翻訳者の能力によるのかもしれない。しかし乏しいながらもこれまでの自分の経験を鑑みるに、アラビア語古典籍の歴史的ペルシア語訳、特にモンゴル時代以前のものについては、決して翻訳は正確ではなく、かなりな意訳を看取できることが多い。「翻訳」の概念は近年人文学のあらゆる分野でキーとなっているのだが、歴史的文献の歴史的翻訳、というものについてあらためて考える手がかりを、この地方史の会読は与えてくれたように思う。

会読自体は実は三年目の冬には一旦終わったのだが、それから一年間をかけて訳註の見直しを行ってきた。それでもまだ見直し切れていない部分はあるので、今後も班員の助けを借りながら原稿を仕上げ、なるべく早くに日本語訳注として公刊したいと思っている。

古典中国語と系列ラベリング

安岡孝一

コンピュータによる言語処理という観点から見ると、古典中国語（漢文）の白文というのは、かなり厄介なシロモノである。単語と単語の間に区切りがない。文と文の間にも区切りがない。漢字がズラズラと切れ目なく並ぶだけ。こんなもの、どうやって読めばいいのか、と『人文』第六六号に書いてから、四年が過ぎた。

共同研究班「古典中国語のコーパスの研究」では、系列ラベリングという手法を用いることで、これらの問題に挑んできた。系列ラベリングは、品詞付与や固有表現抽出のために開発された手法で、われわれも品詞付与に用いてきた。ただし、われわれが古典中国語向けに作成した言語モデル RoBERTa-Classical-Chinese

```
!pip install deplacy transformers
class SeqL(object):
  def __init__(self,bert):
    from transformers import pipeline
    self.tagger=pipeline(task="ner",model=bert)
  def __call__(self,text):
    w=[(t["start"],t["end"],t["entity"]) for t in self.tagger(text)]
    u="# text = "+text.replace("\n"," ")+"\n"
    for i,(s,e,p) in enumerate(w,1):
      m,q="_" if i<len(w) and e<w[i][0] else "SpaceAfter=No",p.split("|")
      f="_" if p.find("=")<0 else "|".join(t for t in q if t.find("=")>0)
      u+="\t".join([str(i),text[s:e],"_",q[0],"_",f,"_","_","_",m])+"\n"
    return u+"\n"
nlp=SeqL("KoichiYasuoka/roberta-classical-chinese-base-sentence-segmentation")
doc=nlp("子曰學而時習之不亦説乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎")
import deplacy
deplacy.serve(doc,port=None)
```

B	E	B	M	E3	E2	E	B	E3	E2	E	B	M	M	E3	E2
子	曰	學	而	時	習	之	不	亦	説	乎	有	朋	自	遠	方

E	B	E3	E2	E	B	M	M	E3	E2	E	B	M	E3	E2	E
來	不	亦	樂	乎	人	不	知	而	不	慍	不	亦	君	子	乎

```
!pip install deplacy transformers
class SeqL(object):
  def __init__(self,bert):
    from transformers import pipeline
    self.tagger=pipeline(task="ner",model=bert)
  def __call__(self,text):
    w=[(t["start"],t["end"],t["entity"]) for t in self.tagger(text)]
    u="# text = "+text.replace("\n"," ")+"\n"
    for i,(s,e,p) in enumerate(w,1):
      m,q="_" if i<len(w) and e<w[i][0] else "SpaceAfter=No",p.split("|")
      f="_" if p.find("=")<0 else "|".join(t for t in q if t.find("=")>0)
      u+="\t".join([str(i),text[s:e],"_",q[0],"_",f,"_","_","_",m])+"\n"
    return u+"\n"
nlp=SeqL("KoichiYasuoka/roberta-classical-chinese-base-ud-goeswith")
doc=nlp("子曰學而時習之不亦説乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎")
import deplacy
deplacy.serve(doc,port=None)
```

NOUN	VERB	VERB	CCONJ	NOUN	VERB	PRON	ADV	ADV	VERB	PART	VERB	NOUN	ADP	VERB	NOUN
子	曰	學	而	時	習	之	不	亦	説	乎	有	朋	自	遠	方

VERB	ADV	ADV	VERB	PART	NOUN	ADV	VERB	CCONJ	ADV	VERB	ADV	ADV	NOUN	X	PART
來	不	亦	樂	乎	人	不	知	而	不	慍	不	亦	君	子	乎

は、一文字ずつの系列ラベリングに特化している。

一文字ずつの系列ラベリングは、古典中国語の文切りに適している。具体的には、文頭の漢字に対するラベルをB，文末の漢字に対するラベルをEとして、B・M・E3・E2・Eを用いて各文を表す。ただし、一文字だけの文はラベルをSとする。前ページ上図に、Google Colaboratory上での文切りプログラムと、『論語』の一節を文切りした結果を示す。

一文字ずつの系列ラベリングは、古典中国語の品詞付与にも適している。ただし、二文字以上の単語については、一文字目に品詞ラベルを付与しておき、二文字目以降はXを付与する、というトリックを必要とする。前ページ下図に、Google Colaboratory上での品詞付与プログラムと、『論語』の一節に品詞付与した結果を示す。

ところが係り受け解析となると、一文字ずつの系列ラベリングは、必ずしもうまく動かない。各文字の間の係り受け関係を、有向グラフにおけるリンクとみなし、隣接行列を確率的に解く手法に挑戦してみたが、そこそこ解析精度は出るものの、二文字以上の単語が増えると精度がどんどん下がってしまう。一般的な漢文においては、二文字以上の単語はあまり多くないが、それでも官職は手ごわい。また、漢訳仏典は、二文字以上の単語だらけであり、文法の異様さもあって、今のところ手に負えない。

一方で、古典中国語に対する系列ラベリングは、タイ語やベトナム語にも応用できるようだ。まだまだ、研究すべきことは多い。今後のわれわれの研究の進展に期待されたい。

生きる身体のおどろおどろしさ

酒井朋子

数日前のことである。近くのスーパーに天然物のブリが大きな切り身で安く売っていた。つやつやしていきがよさそうに見える。隣にあるタイは旬のはずだが、ちょっと身がダレて見えるし高い。家族に聞くと、今はブリの旬としてはかなり遅いはずだが、最近はこの時期に売り出しているのをよく見ると言う。気候や海流が変化している影響もあるのか。買って幽庵焼きを夕食にためすことにした。

塩をふって置いたのちに、しょうゆと酒とみりんを一：一：一で合わせたものに一時間ほど漬けて焼く。仕上げに漬け汁をかけながら焦げ目をつけていくのだが、ここで火を入れすぎた。わたしはいつもそうで、焼き魚をジューシーに仕上げるのが苦手だ。今回も黒くなりすぎた。

そのブリを食べていたら、皮と血合いのあいだに妙な長細いひも状のものが見える。何かと思ってつつくと、とぐろを巻いたものがワラワラと出てきた。思わずぎゃっと声が出た。

寄生虫である。アニサキスだ、と思った。直径2mmほどだろうか、けっこうな太さがある。色は不透明の茶色がかった灰色。タンパク質が完全に変性していて、明らかに死んでいた。先ほど焼きすぎるくらい焼いておいてよかったと安堵もする。周囲の身をほぐし、ほかに異変がないのを確認してからゴミ箱に捨てた。隣に座っていた子どもが目を丸くして一部始終を見ている。

それにしても気味の悪い外見だった。長いひも状のものが小腸のようにうねった姿が脳裏にやきついていて、数日たっても気がつけば思い起こしている。

その虫はとっさにアニサキスだと思ったが、あとで調べると、ブリについていたことと大きさから判断するにブリ糸状虫というものらしい。人には寄生しない。うっかり生きたまま胃に入り込んでしまうと激しい腹痛や嘔吐をもたらしうるアニサキスと違い、食中毒の原因にもならない。生の状態ですら体内に入れても問題ないということだ。しかし、そういわれて「じゃあ食べても大丈夫」と積極的になる人は多くはあるまい。わたしは残りの身を食べたが、まるごと捨ててしまう人も少なくないだろう。

あらためて考えると、感覚的嫌悪は非-知性的で非

合理である。ブリ糸状虫より危険なアニサキスにしたところで、じゅうぶんに加熱してしまえば食べたところで害はない。寄生虫というとそれだけでグロテスクな印象があるが、わたしたちの生はいつも寄生的生物とともにあるのであって、カーペットや布団はおろか顔など皮膚の上にもダニがいるという。では皿の上の「あれ」との遭遇にともなった衝撃は、おどろおどろしく見えるけれど無害なあのものへの忌避感は、無知さや愚かさの証として片付けてしまうべきなのか。

そういう部分は確かにある。嫌悪や恐怖は遭遇対象が未知のものであることによって倍加されうる。相手のしくみやくせをよく知れば、おどろおどろしさもしだいに後退していく。しかしここで考えてみたいのは、グロテスクなものがもたらす相反する情動であり、その深遠さである。何かをおぞましいと思う感覚経験は、ときにあらがいがたい、えたいのしれない引力に巻き込まれていくことでもある。嫌悪とエロチシズムの領域が近接しており、ときに重なっていることとも関係している。

ウィリアム・イアン・ミラーという中世史家は、嫌悪感の語彙はいつも感覚的な体験にうったえかけると論じている（『嫌悪の解剖学』一九九七年）。におい――たとえば動物の身体やその老廃物の臭気。甘ったるいもの、粘り気のあるもの、くねくねと波打つもの。食べ物や飲み物のなまあたたかさ。それは「生きている身体」への嫌悪であり、さらにいえば、想定とは異なる場所で、異なるものが、異なるかたちで「生きていたのだ」という発見に対する驚きの反応である。

グロテスクは、かつては生物と生物とが個体も種も超えて合体しからまりあう図を形容する言葉であったし、今もその含意がうっすら残っている。ある生き物の内部で別の生き物が息づいている。もしくはある生き物と別の生き物が混じり合い身体を共有し、区分けることができない。ジュリア・クリステヴァがアブジェクシオンと名付けて描出した、「かつて母と一体だった」ことへの嫌悪もこれに関わる。こうした現象への畏怖と忌避感は、同時に自身の身体および生活空間のなまなましさの再確認とつながっているのであって、単純な他者化の感情としては説明できない。

ブリ糸状虫に話を戻そう。この虫がつくのは、おもに産卵終了後のヤセブリであるという（中島健次・江草周三・中島東夫「ブリに寄生する線虫 Philometroides seriolae の魚体脱出現象について」『魚病研究』四（二）、一九七〇）。とするとやはり、あれは旬をはずした買い物で、けして美味くはない魚だったということになるのか。脂がそこそこ乗ってい

て、まずくはないように感じて食べていたが、自分の味覚も疑わしくなってくる。春のブリは、いろいろな意味で要注意である。

ミュージックと「いにしへまなび」

金　智慧

よく「音楽は人生を豊かにする」という言葉を耳にするが、自分の人生を振り返ってみて非常に共感できる一言であると思う。私が音楽の魅力を知ったのは、小学五年生くらいの頃だったと記憶している。ポップ好きの父親の影響もあり、アバ、ビー・ジーズ、ジョージ・マイケル、クィーンなど、小学生にしては随分古めかしいひと昔の音楽に接することが多かった。なかでもすっかりとりこになったのは、クランベリーズというアイルランド出身のロックバンドである。ライセンス版のCDをデスクトップに入れて聴くのが放課後の日課であったが、親にねだってMP3をプレゼントしてもらってからは場所に制限されず聴くことができた。今の時代なら考えられないことであるが、最初に手に入れたMP3は十数曲しか入れられない低用量のものだったので、どんな曲を選択して入れるかが当時の最大の悩みだった。一旦厳選したプレイリストでも、あれが欲しい、これが欲しいということで三日も持たず、入れ替える日々の繰り返しが続く。これが生まれてはじめて何かに「はまる」経験だったので、そういう意味でもクランベリーズの音楽は私にとって格別である。

音楽に関する専門知識や歴史などを深く探求したりまではしなかったが、それ以降もだいたいロック一筋という感じで、イギリスやアメリカ、日本のロックバンドの様々な音楽を試して（十代の私は韓国の音楽を聴くのがなぜか粋ではないことに思えて距離を置いていた）、気に入ったアーティストが見つかれば、とにかく全曲を聴いてみることにした。一、二曲はよかったが、すべてのアルバムを聴いてみるとしっくりこない場合も多々あるので、予選通過（？）してプレイリストに残り続けたアーティストには忠誠を尽くす。それから、もう一つの音楽の愉しみ方は、好きなアーティストがインタビューなどで影響を受けたアーティストに言及すると、それらにあたってみることだった。そのおかげで発見できたバンドも多く、たとえば、オ

アシスからビートルズ、コールドプレイからアーハ、アジカンからウィーザーへと遡っていくと自分の中の音楽世界もどんどん広がっていった。

二十代になってからは、アヴィーチー、イマジン・ドラゴンズ、パラモアなどが好きになり、ビルボード・チャート入りの人気曲やK-POPといった同時代の音楽も聴くようになったが、それにしてもやはり私が生まれる直前か、生まれてほどなくして活動していた二十世紀末のアーティストたちに惹かれることが多い。こうしたノスタルジア志向は、何となく研究を行う上にも活かされていた気がする。最初、明治期の散切物（歌舞伎世話物の一種）に興味を持ったのも、文明開化期にみられる過ぎ去った時代への郷愁や恋しさがありありと映し出されているように感じられたからである。皮相的にしろ、明治初期の時代相と新文物を活写したというのが散切物の一般的な評価ではあるものの、やはり個人的には激動の時代に取り残された人間群像の方に目が向いてしまう。

いつの時代にも過去の事象に関心を寄せる人たちがいて、芝居に関して言うと、十七世紀初頭の寛永期から文化元年までおよそ百八十年間にのぼる歌舞伎の歴史と上演記録を網羅した烏亭焉馬の『花江都歌舞妓年代記』の編纂は、趣味や道楽のレベルを遥かに超えた想像を絶する偉業である。こうした焉馬を肖り、式亭三馬は百年間におよぶ役割番付を年代順に貼り込んだ『江戸三芝居紋番付』を制作し、石塚豊芥子は文化文政期から安政年間の上演記録を整理した『続歌舞伎年代記』を上梓した。彼らの執着的というほどの考証精神に基づいた「いにしへまなび」を継承し、明治大正期には、伊原敏郎『歌舞伎年表』、田村成義『続々歌舞伎年代記』、関根只誠『東都劇場沿革誌』など、現在の歌舞伎研究の基礎となる史料が編纂されている。

私などは彼らのような芝居通の考証癖やマニアックさにはとうてい及ばないが、明治期以来の近代歌舞伎の歴史を自分なりの視点でまとめてみたいという素朴とも膨大ともいえる夢（目標といった方がよいか）がある。それと同時に、頭の片隅ではウィーザーのデビューアルバムが出た一九九四年や、オアシスの伝説的な曲のワンダーウォールが発表された一九九五年ころにタイムスリップしたいという、しょうもない空想を巡らせたりもするのである。

「大体できてる」

福谷　彬

筆者が研究所から人間・環境学研究科へ異動してしばらくした頃、ある飲み会で研究所のHさんとお話していた時のことだ。先生は最近、原稿の取りまとめ作業をされていて、あることに気が付いたという。締め切りを遅れる執筆者が、締め切り超過前に、異口同音に口にする言葉があるというのだ。

「研究やってる人ってよく「大体できてる」って言うことあるやん。あれ言う人、思うんやけど大体ほとんど書けてないよ。」

その時は「あー確かに」などと言いながら、その場でゲラゲラ笑っていたものだ。夢にも思わなかった。半年以上たってその言葉でこれほど自ら身につまされようとは。

筆者の異動が決まったのは昨年度末だった。正式な決定が遅くなった関係で、昨年の『所報人文』で異動のご挨拶をしそびれてしまった。編集委員の皆さんのご厚意で「うちとそと」の執筆の機会を頂いて、軽い気持ちで引き受けたのだった。最初は昨年の四月から人環の教員として異動し、一年間学生に講義した時の体験談を書こうと思っていた。構想はすぐにできた。

春先に吉田南を歩いていて新入生と間違われて、学生集団からサークルに勧誘された話から説き起こそう。そして、勘違いされたのも不思議はない、期待と不安で心がいっぱいの人環教員一年生ではないか、と話を持っていく。それから講義での面白エピソードをいくつか書いて、最後は一回生に戻ったつもりで初心に帰って取り組みたいという感じで締めくくる…。講義内容と絡めて、孔子は自分が弟子に教えるだけではなく、弟子から学ぶこともあったという話を取り上げてもいいかもな…。

「よし。大体できた。」

そう思ってとりあえずしばらく原稿を塩漬けにして、別の原稿と授業準備に切り替えたのが誤りだった。締め切りが近づいてからいざ書いてみると、一向にうまくいかないのだ。まず面白エピソードの大半は、実際に文字にしてみると、ちっとも面白くならない。趣向を改めて講義の苦労話として書いてみた。今度はすらすら書けるが全体が愚痴っぽくなって、なんだか後味が悪い。悩んだ末、「学生の反応からこういうことを学び、成長できた」という方向で改めようとしたが、

どうも実感がこもらない。自分で書きながら、白々しいレポート課題を見ているような気分になってきた。

あれこれ悩んでいるうちに、なんだか懐かしい感覚を思い出す気がした。思えば、学生時代、こんな状況の繰り返しだったのではないだろうか、ということだ。

史料を読む中で、こういう見通しで論文を書こう、という方針がなんとなく固まってきて安心する。方針が固まると、論旨に合う材料がどんどん集まって（いるように錯覚して）、自分の中でのブレークスルーを迎えた心境になる。締め切りが近づいてきたところで史料の細かいところにまで気を付けた作業に取りかかる。新たに史料をあれこれ見ているうちに、だんだんと当初の史料の理解は自分に都合よく読んでいただけではないか、という疑念がわき始める。読めば読むほど、全然違う話に思えてきたところで疑念は焦燥へと転ずる。ギリギリまで格闘し、論文の締め切り数日前になって、当初の方針を大幅に改めて、まったく異なる内容でまとめる（そして、各方面からお叱りを受ける）…。

そんなことを学生時代何度も繰り返した。このように書くと過去のことのようだが、不思議とこれと同じアクロバティックな体験はここ最近していなかった。研究の取り組み方は、今も大して変わらないはずなのに、である。そこで改めて考えてみると、学生時代と今とでは大きく異なる状況がいくつかあった。

まず、間に合わないと思ったらそもそも無理に提出する必要が今はなくなったことだ。学生時代は学位論文にしても査読論文にしても、間に合わないことによるリスクが大きすぎて、無理にでも出さざるを得なかった。また、今は事情を説明すれば締め切りの方が延びてくれることが増えた。学生時代はそうはいかない。そのように考えてみれば、課程博士論文を抱えた学生は、学位論文提出のために、相当のストレスとプレッシャーの中で研究をしているわけだ。当たり前の経験と思って疑問に持つことすらなかったが、これほどのプレッシャーはその後は恐らくもう経験しないかも知れない。一度教員となってしまうと、自分の方が学生より忙しい、自分の学生時代の方が大変だった、そう思って、学生の抱えるストレスに対する想像力が減退してしまうのかも知れない。肝に銘じておきたい。

研究所の「そと」へ出て今年で二年目だ。吉田南でフレッシュな学生たちと接する中で、自分の学生時代の経験を、今度は教員として活かしていきたいと感ずる。研究計画を語ると雄弁だが、なかなかエンジンが始動しない学生。そんな学生には、自分と同じ轍を踏む前に教えてあげたい。「大体できてるは、大体できてないんだよ」と。

書いたもの一覧　二〇二二年四月～二〇二三年三月（氏名五十音順　◉は単行本）

石井美保

〈うた〉と〈つき〉と風流夢譚　人文　六九号　六月

◉遠い声をさがして―学校事故をめぐる〈同行者〉たちの記録　岩波書店　六月

編集後記　文化人類学　八七巻一号　六月

「回復の物語」に抗い、亡き人の声に耳をすます　図書　八八四巻三二号　七月

◉たまふりの人類学　青土社　十一月

Living in the forest as a pluriverse: Nature conservation and indigeneity in India's Western Ghats *Journal of Political Ecology* 29(1)　十二月

石川禎浩

第五章　政治史　岡本隆司・吉澤誠一郎編、袁広泉・袁広偉訳『近代中国研究入門』　当代世界出版社　四月

書評　高橋伸夫著『中国共産党の歴史』　中国研究月報　八九二号　六月

「十月革命の砲声がとどろき」―アジアの共産主義運動　永原陽子・吉澤誠一郎編『岩波講座　世界歴史　二〇　二つの大戦と帝国主義Ⅰ　二〇世紀前半』　岩波書店　九月

大沢武彦氏の書評に対するリプライ　中国現代史研究　四九号　十一月

戦前日本の毛沢東観　福家崇洋ほか編『思想史講義【戦前昭和篇】』　ちくま新書　十一月

◉中国共産党百年史　台湾商務印書館　一月

稲葉穣

◉Deborah G. TOR and Minoru INABA (eds.) *The History and Culture of Iran and Central Asia: From the Pre-Islamic to the Islamic Period.* University of Notre Dame Press.　四月

Central Asia in the Mid-Eighth Century: Wukong's Itinerary toward India, Deborah G. TOR and Minoru INABA (eds.) *The History and Culture of Iran and Central Asia: From the Pre-Islamic to the Islamic Period.* University of Notre Dame Press.　四月

Kābul and the Regional Centers of Eastern Afghanistan in the Historical Perspective, Liu XINRU (ed.) *The World of the Ancient Silk Road.* Routledge.　九月

稲本泰生

雲岡石刻録―「雲岡金石録」改訂版―（分担執筆）

東方学報　九七冊　十二月
牛伏寺の文化財をたずねて　牛伏寺だより　四四号　一月
序にかえて　筒井忠仁編『仏師と絵師―日本・東洋美術の制作者たち（根立研介先生退職記念論集）』
思文閣出版　三月
編集後記（短評）　仏教芸術　十号　三月

岩城卓二

◉論点・日本史学（共編著）　ミネルヴァ書房　八月
◉西宮神社文書　三（共編）　清文堂出版　三月
書評　野本禎司『近世旗本領主支配と家臣団』
東北アジア研究　二七号　三月

岡澤康浩

接続と切断の科学史に向けて　人文　六九号　六月
書記技術のマテリアリズム：ブリュノ・ラトゥールのメディア論のために　現代思想　五一巻三号　三月

岡村秀典

中国で発見された景初三年鏡　史林　一〇五巻五号　九月
画紋帯神獣鏡の東伝―型式と鉛同位体比からみた九子派の動態　東方学報　九七冊　十二月
The Transformation of Rules for Chariots and Carriages in the Han-Chin Period. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 66 The Tōhō Gakkai Archaeological Research on the Han-Chin Transition. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 66 The Tōhō Gakkai　十二月
◉夏王朝　中国文明的原像　大象出版社　二月

籠谷直人

◉近代東南アジア社会経済の国際的契機（共編）　臨川書店　三月

菊地暁

〝ハガキ職人系〟民俗学者の奔放：宝塚文芸図書館員辰井隆について分かったこと　近代出版研究　創刊号　四月
第一三回南方熊楠ゼミナール：パネルディスカッション　熊楠works　五九号　四月
どうして人は、何かを残したいと思うの？　公益財団法人せたがや文化財団・生活工房編・発行『生活工房アニュアルレポート二〇二一』　四月
はじめに：那賀川流域調査概要　早稲田大学中谷礼仁建築史研究室編・発行『二〇二一年度高地・流域研究　四国山地那賀川流域調査報告書』　四月
インタビュー　わが大学の先生と語る：ありのままを見つめて　季刊読書のいずみ　一七二号　九月
対談　竹中労という思想　原田健一編『映像をめぐる生のポリフォニー：七人のヴォワイアン〈見者〉との対話』

日本心霊学会編集部代表・野村瑞城（政造）の作品と略歴　日月舎　九月
栗田英彦編『「日本心霊学会」研究』　人文書院　十月
西田・折口講演解題　栗田英彦編『「日本心霊学会」研究』　人文書院　十月
高梁川・日野川流域管見　早稲田大学中谷礼仁建築史研究室編・発行『二〇二二年度高地・流域研究　中国山地高梁川・日野川流域調査報告書』　十一月
鎌倉殿と京の生首のパレード　京都新聞朝刊　十二月九日付
やさぐれて民俗学を批判していた私が『民俗学入門』を書くまで　京都民俗　四〇号　十二月
◉ライフヒストリーレポート選二〇二二　京都大学民俗学研究会（編著）　十二月
人生のかけらを集める　図書　八八九号　一月
◉민속학 입문　에이케이 커뮤니케이션즈　二月
占領期カラー写真のなかの海女　植田憲司・衣川太一・佐藤洋一編『増補新版　戦後京都の「色」はアメリカにあった！―占領期カラー写真が描く〈オキュパイド・ジャパン〉とその後―』　小さ子社　三月
人に話を聞くということ　木谷百花編『旅するモヤモヤ相談室』　世界思想社　三月
道産子が民俗学を学んで『ライフヒストリーレポート選』を編むまで　口承文芸研究　四六号　三月

金　智慧

坪内逍遥の史劇改良―『桐一葉』における〈型〉の破壊―　日本研究　三八号　八月
追善公演の史的展開とその意味　歌舞伎：研究と批評　六七号　十一月
名所の形成と名所イメージの構築―『平家物語』の築島伝説を手掛かりに―　BUNRON　九号　十二月
五代目尾上菊五郎と尾上家の家の芸―新古演劇十種を手掛かりに―　日本學報　一三四号　二月
◉明治歌舞伎史論　懐古・改良・高尚化　思文閣出版　三月

倉本尚徳

◉儀礼と仏像　臨川書店　八月
雲岡石刻録―「雲岡金石録」改訂版（編・分担執筆）　東方学報　九七冊　十二月
儀礼と仏像―仏に見える仏にまみえる　朝日新聞夕刊　三月十七日
東京大学中国思想文化研究室ニューズレター　三月
玄奘と高宗―智首律師碑の再検討　氣賀澤保規編『論集　隋唐仏教社会とその周辺』　汲古書院　三月

呉　孟晋

広東から来た前衛画家―一九三〇年代の東京における李仲生の画業について―　『アジア遊学』二六九号　五月
動向　美術　『中国年鑑二〇二二』　中国研究所　五月

森琴石ゆかりの中国書画および書簡資料について—来舶清人との交流を中心に—（陳捷と共著）　学叢　四四号　六月
私の「訂正欄」　人文　六九号　六月
王済遠的油画、水彩画和水墨画—従日本交流談起—　包銘新主編『旅行的筆墨—王済遠的絵画芸術—』　広州：嶺南美術出版社　九月
田能村直入の中国憧憬から思ったこと『田能村直入とその子弟』展図録　天門美術館・山添天香堂　十二月
継承薄儒筆墨的日本画家—論伊藤紫虹的抽象水墨画—『水墨，結束了嗎？—再現筆墨精神国際研討会論文集—』　台北：雄獅図書股份有限公司　二月

古勝隆一

◉中国注疏講義—経書の巻　法藏館　九月
『文史通義』内篇五訳注（共著）　東方学報　九七冊　十二月

小関隆

コラム：未完のアイルランド革命『岩波講座世界歴史20　二つの大戦と帝国主義Ⅰ　二〇世紀前半』　岩波書店　九月
一九二〇年代の「戦後の戦争」とは「パラミリタリー」が毒した社会（インタヴュー）　朝日新聞デジタル　九月十四日

小堀聡

書評　伊藤正直著『戦後文学のみた〈高度成長〉』　歴史と経済　六四巻三号　四月
When Energy Efficiency Begets Air Pollution: Fuel Conservation in Japan's Steel Industry, 1945–60. *Technology and Culture* 63(2)　四月
鎌倉から鴨川へ—二つの漱石句碑　人文　六九号　六月
Book Review Ohara Institute for Social Research, Hosei University and Akira Suzuki (eds). Rōdōsha to Kōgai・Kankyō Mondai［Workers and pollution/environmental problems］. Tokyo: Hosei University Press, 2021. *Japanese Research in Business History*(39)　十二月
書評　橘川武郎著『災後日本の電力業—歴史的転換点をこえて』　経営史学　五七巻三号　十二月
◉新修豊田市史総集編（新修豊田市史編さん専門委員会編）　三月

酒井朋子

Humour and the Plurality of Everyday Life: Comical Accounts from an Interface Area in Belfast. *Social Anthropology* 30(3) European Association of Social Anthropologists　九月
書評　村本邦子著『周辺からの記憶—三・一一の証人となった十年』　社会と倫理　三七号　一二月
コラム5　軍事独裁政権の暴力に抗する手縫いの壁かけ—チ

リのアルピジェラ　鈴木紀（編）『特別展　ラテンアメリカの民衆芸術』　国立民族学博物館　三月
紛争体験と笑い―不条理な現実から生まれる冗談　神戸大学人文学研究科編『人文学を解き放つ』　神戸大学出版会　三月

佐藤淳二

倒錯と法：「症例」ルソーとその思想　十川幸司・藤山直樹編著『精神分析のゆくえ 臨床知と人文知の間』　金剛出版　十月
書評　差異の一般意志論への擁護　西川純子著『統治のエコノミー』　週刊読書人　四月二二日

白須裕之

漢字の意味と構造についての論理学的な試論―文字論と字符論を手掛かりにして―　東方学報　九七冊　十二月

瀬戸口明久

Jaehwan Hyun, Akihisa Setoguchi, and Mary Augusta Brazelton, Some Reflections on the History of Masked Societies in East Asia, *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 16.　四月
書評　ジョエル・モキイア（長尾伸一監訳、伊藤庄一訳）『知識経済の形成』　西洋史学　二七三号　六月
人間-装置-自然系としての科学―『客観性』の歴史叙述と科学批判　生物学史研究　一〇二号　三月

高井たかね

◉田中淡著作集二　中国建築と庭園　中央公論美術出版　二月
解題　高井たかね編『田中淡著作集二　中国建築と庭園』　中央公論美術出版　二月
翻訳　田中淡「日本初期の造園書と浄土庭園―『作庭記』と古代日本および中国におけるその背景」　高井たかね編『田中淡著作集二　中国建築と庭園』　中央公論美術出版　二月

高木博志

世界遺産と陵墓古墳名称―大山古墳（自治体が決めた文化財名称）の提案　日本史研究　七一七　五月
「日本部」の共同研究の思い出　人文　六月
京都高等工芸学校とその時代　『学理と応用―京都高等工芸学校初一〇年の軌跡』　京都工芸繊維大学美術工芸資料館　十月
山尾幸久先生を追悼する　『志賀の曙光―山尾幸久先生追悼文集』　山尾幸久先生追悼文集刊行世話人会　十一月
◉人文学報―特集・近代京都と文化（編集）一二〇　二月
〈史料紹介〉民芸同人・寿岳文章宛水谷良一書簡（向日庵所蔵）　人文学報　一二〇　二月
京都の帝室技芸員―特別展「綺羅めく京の明治美術―世界が驚いた帝室技芸員の神業」に寄せて

京都市京セラ美術館ニュース　三月

竹沢泰子

Social Issues and the Role of Anthropology in Contemporary Japan, Gustavo Lins Ribeiro（ed.）*Pathways to Anthropological Futures*　十月

◉*Race and Migration in the Transpacific.*（共編）Routledge　一月

Preface to the Special Issue on Genetics, DTC, and Their Social Implications. *Anthropological Science* 131(1)　一月

Comparing direct-to-consumer genetic testing services in English, Japanese, and Chinese Websites.（共著）*Anthropological Science* 131(1)　一月

◉アメリカの人種主義―カテゴリー／アイデンティティの形成と転換　名古屋大学出版会　二月

◉日本学術会議シンポジウム「人類学者と語る人間の『ちがい』と差別」報告書（共編）　同実行委員会　三月

人種と民族　横山智他編『フィールドから地球を学ぶ』　古今書院　三月

人種主義と反人種主義　横山智他編『フィールドから地球を学ぶ』　古今書院　三月

立木康介

トラウマ記憶とトラウマ経験のあいだ―精神分析的外傷論のアップデートの試み　人文學報　一一九号　六月

他者性の否認、愛の砂漠―討論の後に、藤山直樹・十川幸司編『精神分析のゆくえ』　金剛出版　一一月

◉極限の思想　ラカン　講談社選書メチエ（Le Livre）　一月

都留俊太郎

書評　堀内義隆『緑の工業化：台湾経済の歴史的起源』　歴史学研究　一〇二五号　八月

李応章的摩托車：二林街的経済発展和蔗農組合　許雪姫主編『世界・啓蒙・在地：台湾文化協会百年紀念（上）』　中央研究院台湾史研究所　二月

直野章子

「原爆の絵」が拓く証言の場　蘭信三・石原俊・一ノ瀬俊也・佐藤文香・西村明・野上元・福間良明編『シリーズ戦争と社会五　変容する記憶と追悼』　岩波書店　四月

論点「核共有」核の加害国になる選択　望む安全保障の形なのか　大阪歯科保険医新聞　五月二五日

現代のことば　核時代の岐路　京都新聞夕刊　五月二七日

特集　戦争社会学の可能性〈人間〉を取り戻す―立ち上がる原爆被害者たち　思想　一一七七号　五月

小特集「記憶の存在論と歴史の地平」に寄せて　人文学報　一一九号　六月

記憶を擁護する―「あり得ない出来事」の記憶を追いながら　人文学報　一一九号　六月

針路二一　戦争と子ども　重大な権利侵害は過去最多

神戸新聞　八月二二日
針路二一　母親たちのケア労働　ステイ・ホーム生活支えたのは　神戸新聞　十二月二八日
書評　安東量子著『スティーブ&ボニー』　共同通信配信（山梨日日新聞、福島民友、徳島新聞、佐賀新聞ほか）　二月一二日ほか
Nationalism under the Banner of Pacifism: Japanese Atomic Bombing Sufferers' Struggle against the State. Simon AVENELL (ed.) *Reconsidering Postwar Japanese History: A Handbook*, MHM.　三月

永田知之

読京都大学人文科学研究所蔵鈔本《周易正義》跋（陳卓然訳）　王曉平主編『国際中国文学研究叢刊』十二集　上海古籍出版社　十一月
『文史通義』内篇五訳注（共訳）　東方学報　九七冊　十二月
書儀と罪の意識―死者を悼む言葉の定型化　敦煌写本研究年報　十七号　三月

中西竜也

地域ごとの言語と文字（中国）　八木久美子編『イスラーム文化事典』　丸善出版　一月
◉よくわかる中国史（共編著）　ミネルヴァ書房　二月
「聖」なる賽典赤とムスリム・アイデンティティ―清代中国の預言者一族の対外生存戦略と内的緊張関係　東洋文化　一〇三　三月

野原将揮

《漢簡語彙考證》訂補（四）―訊　簡帛網　五月
構擬上古音　*Kr-：以《安大簡》「緣」為例　聲韻論叢　二八輯　六月
闽语中来自　*m.r- 和　*ŋ.r- 的来母字（共著）　辭書研究　五期　九月
Old Chinese 'egg.: More evidence for consonant clusters. *Language and Linguistics* 24 (2), John Benjamins Publishing Company　三月
略談『非』的上古音及相關問題　雲漢　一号　三月
解説　上古音研究の方法と二つの仮説　漢字之窓　七　六月
新刊紹介　裘錫圭著、稲畑耕一郎・崎川隆・荻野友範訳『漢字学講義』　中国出土資料学会会報　七五　十二月
辞典項目　漢簡、九店楚簡、鏡銘、孔子詩論、侯馬盟書、古文四声韻、出土資料、新蔡楚簡、曾侯乙墓、中山王墓、天星観楚簡、買地券、礼記、老子　日本中国語学会編『中国語学辞典』　岩波書店　十月

平岡隆二

書評　大島明秀著『蘭学の九州』　熊本日日新聞　七月一〇日
キリシタンと科学伝来―宣教師はなぜ西洋科学を紹介し、どのように受容されたのか―　岩城卓二ほか編『論点・日本史学』　ミネルヴァ書房　八月

◉Special issue: East-West Contacts and Scientific Culture in Early Modern East Asia 2. *Historia scientiarum* 32-2　三月

The Discovery and Significance of *Sufera no nukigaki* (Selection on the Sphere), a Jesuit Cosmology Textbook in Japanese Translation. *Historia scientiarum* 32-2　三月

フォルテ　エリカ

'Khotanese Themes' in Dunhuang: Visual and Ideological Transfer in the 9th-11th Centuries. Yukiyo KASAI and Henrik H. SORENSEN (eds.) *Buddhism in Central Asia II. Practices and Rituals, Visual and Material Transfers*, Brill.　七月

福家　崇洋

資料紹介　宮崎家所蔵宮崎滔天関係資料　人文学報　一一九号　六月

蕗苳さんへの追悼文　ことたま　宮崎蕗苳追悼号　七月

労働運動　岩城卓二・上島享・河西秀哉・塩出浩之・谷川穣・告井幸男編著『論点・日本史学』　ミネルヴァ書房　八月

◉思想史講義　大正篇（共編）　筑摩書房　八月

刊行の辞（共著）　山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義』大正篇　筑摩書房　八月

はじめに　『思想史講義』大正篇　筑摩書房　八月

共同研究報告　近現代史部会　戦間期日中交渉における宮崎龍介　日本史研究　七二一号　九月

◉思想史講義　明治篇Ⅰ（共編）　筑摩書房　一〇月

奈良のモダニズム　鉄道・歌劇・映画　NARASIA Q　二二号　一〇月

翻訳　Miki Kiyoshi "La forme marxienne de l'anthropologie"（共訳）*European Journal of Japanese Philosophy*　七号　一〇月

無産政党の台頭と挫折　筒井清忠編『昭和史研究の最前線　大衆・軍部・マスコミ、戦争への道』　朝日新聞出版　一一月

堺利彦―社会主義運動から部落問題をとらえる　朝治武・黒川みどり・内田龍史編『非部落民の部落問題』　解放出版社　一一月

◉思想史講義　戦前昭和篇（共編）　筑摩書房　一二月

はじめに　山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義』戦前昭和篇　筑摩書房　一二月

国家社会主義と満洲事変　『思想史講義』戦前昭和篇　筑摩書房　一二月

反ファシズム人民戦線論　『思想史講義』戦前昭和篇　筑摩書房　一二月

◉思想史講義　明治篇Ⅱ（共編）　筑摩書房　二月

平民社　山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義』明治篇Ⅱ　筑摩書房　二月

書評　仁昌寺正一『平和憲法をつくった男　鈴木義男』
京都新聞他（共同通信社配信）　三月一九日
戦間期日中交渉における宮崎龍介
日本史研究　七二七号　三月
初期社会主義と部落問題　京都部落問題研究資料センター編
『二〇二二年度差別の歴史を考える連続講座講演録』
京都部落問題研究資料センター　三月
樽井藤吉の軌跡と思想　奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈良に蒔かれた言葉Ⅱ　近世・近代の思想』
京阪奈情報教育出版　三月
『生駒市史史料集第一集　近世・近代史料一　近代郷土誌・風俗誌』（共監修）
生駒市役所　三月

藤　井　律　之

『文史通義』内篇五譯注（共訳）　東方學報　九七冊　十二月
よくわかる中国史（共著）
ミネルヴァ書房　二月
◉北魏文成帝南巡碑碑陰図釈
センター研究年報二〇二二　二月

藤　野　志　織

◉上海フランス租界への招待―日仏中三か国の文化交流（共編著）
勉誠出版　一月
在外教育・文化機関におけるフランス語蔵書の意味を考える―上海アリアンス・フランセーズと関西日仏学館を例に
榎本泰子・森本頼子・藤野志織編『上海フランス租界への招待―日仏中三か国の文化交流』
勉誠出版　一月
私がグロボワに「触れる」まで―コロナ禍を超えて　榎本泰子・森本頼子・藤野志織編『上海フランス租界への招待―日仏中三か国の文化交流』
勉誠出版　一月

藤　原　辰　史

書評　アダム・トゥーズ『世界はコロナとどう闘ったのか？パンデミック経済危機』
朝日新聞　四月二日
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第十四講　ロシアのウクライナ侵攻に寄せて
クーヨン　二十七巻五号　四月
羅針盤　ウクライナの悲劇　自分たちの痛みとして
山陰中央新報　四月三日
交遊抄　幼馴染の同業者
日本経済新聞　四月九日
危機の時代にこそ
東京新聞　四月十日
藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話
第11回「第二歩目」について
みんなのミシマガジン　四月
書評　マルレーヌ・ラリュエル『ファシズムとロシア』
朝日新聞　四月十五日
対談　藤原辰史×葛谷寧鵬―分解の哲学と建築のエイリアン性
建築新人戦013　四月
対談　藤原辰史×笹川大輔×真鍋太一　究極の給食パンを求めて。第1回　京大・藤原辰史先生と「社会を動かすパンの力」について語り合う
料理通信　四月
書評　ベン・ゴールドファーブ『ビーバー：世界を救う可愛

すぎる動物』　朝日新聞　四月二三日
飢餓と飽食の時代　歴史学研究会編『「歴史総合」をつむぐ
―新しい歴史教育実践へのいざない』　東京大学出版会　四月
時論フォーラム　［国際卓越研究大学］研究の破壊を加速　毎日新聞　四月二八日
書評　クリント・スミス『場所からたどるアメリカと奴隷制の歴史　米国史の真実をめぐるダークツーリズム』／シドハース・カーラ『性的人身取引　現代奴隷制というビジネスの内側』　朝日新聞　四月三十日
ナチズムを台所から眺める　月刊みんぱく　四六巻五号　五月
ちんぷんかんぷん大学育学部ゼミ　第十五講　隙間について　クーヨン　二七巻六号　五月
座談会　構築様式のモデルとしての庭　生環境構築史　第4号　特集：構築4の庭へ　五月
「藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話」第13回「サークル」について　みんなのミシマガジン　五月
書評　坂上香『プリズン・サークル』　朝日新聞　五月十四日
時論フォーラム　［沖縄「復帰」50年］歴史と現実の直視を　毎日新聞　五月二〇日
書評　仲尾友貴恵『不揃いな身体でアフリカを生きる―障害と物乞いの都市エスノグラフィー』　朝日新聞　五月二二日
ほどく力　別冊太陽スペシャル　平凡社　五月
シェアの痛みから考える　ちゃぶ台9　春／夏号　五月
農の美学第4回　農に関わるデザインの美　農業と経済　八八巻二号　五月

◉中学生から知りたい　ウクライナのこと（共著）　ミシマ社　六月
ユーラシア東部諸島中立地帯の構想―食を根拠にした生態自治について　ユーラシア東部諸島中立地帯の構想―食を根拠にした生態自治について　グループZAZA　六月
ちんぷんかんぷん大学育学部ゼミ　第十六講　仕立て屋のサーカスとは　クーヨン　二七巻七号　六月
書評　ヴィンセント・ベヴィンス『ジャカルタ・メソッド　反共産主義十字軍と世界をつくりかえた虐殺作戦』　朝日新聞　六月四日
羅針盤　原発再稼働「苦渋の決断」への疑問　山陰中央新報　六月五日
藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話　第15回　異端を育てるために　みんなのミシマガジン　六月
座談会　給食カウンターの冒険　平松知子『このままでは続けることがつらい保育の仲間たちへ』　ひとなる書房　六月
書評　モンティ・ライマン『皮膚、人間のすべてを語る：万能の臓器と巡る10章』　朝日新聞　六月十八日

時論フォーラム　［世界的食料危機］庶民の我慢に頼るな
毎日新聞　六月二三日
官僚文学論―『遠野物語』の報告書的性格について
現代思想　五十巻八号　六月
「子ども」から読む現代史　連載第五回　映画『教育と愛国』を観て
はらっぱ　四一号　六月
座談会　斉加尚代×藤原辰史　『何が記者を殺すのか』刊行記念対談　歴史と教育と愛国と　集英社新書プラス　六月
書評　桑木野幸司『ルネサンス情報革命の時代』
朝日新聞　七月二日
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第十七講　思いやりとしての共苦
クーヨン八月号　二七巻八号　七月
プロムナード　研究室のサーカス　日本経済新聞　七月六日
藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話　第17回　複雑性と単純化の狭間
みんなのミシマガジン　七月
プロムナード　野宿者の哲学ノート
日本経済新聞　七月十三日
フードデモクラシー：食べ物からつくる社会
民医連医療　五九八号　七月
書評　山本章子、宮城裕也『日米地位協定の現場を行く：「基地のある街」の現実』
朝日新聞　七月十六日
プロムナード　餃子への恩返し
日本経済新聞夕刊　七月二十日
ポリティカル・サーカス
わたしたちのコモンズ　三号　七月
「縁食」の時代へ。別冊太陽　日本の台所100年：キッチンから愛をこめて
平凡社　七月
無料の効用
暮しの手帖　十九号　七月
プロムナード　就活廃止論
日本経済新聞　七月二七日
食は単なる栄養補給ではない
北海道新聞　七月二八日
二〇二二年上半期読書アンケート
図書新聞　七月三十日
書評　キム・スム『さすらう地』
朝日新聞　七月三十日
歴史喪失社会
都市問題　百十三巻八号　八月
チンプンカンプン大学育学部　第十八講　植物とは何か
クーヨン九月号　二七巻九号　八月
プロムナード　今、最先端は田舎にある
日本経済新聞　八月三日
負の連鎖を断つ「地球史」という試み
voice　九月号　五三七号　八月
書評　工藤晶人『両岸の旅人　イスマイル・ユルバンと地中海の近代』
朝日新聞　八月六日
プロムナード　高校給食論
日本経済新聞　八月十日
コラム9「パンデミック精神史の断片」　山口輝臣／福家崇洋編『思想史講義【大正篇】』
ちくま書房　八月
藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話　第19回　歴史の中の「射」と「群」
みんなのミシマガジン　八月
各自核論　衰弱した民主主義の証拠
北海道新聞　八月十一日

書評　サラ・ロレンツィーニ『グローバル開発史』
朝日新聞　八月十三日
現場からの農村学教室　飢えてからでは遅い
日本農業新聞　八月十四日
プロムナード　就活廃止論2
日本経済新聞　八月十七日
羅針盤　本屋と図書館を育てる　水をやるように声がけを
山陰中央新報　八月二一日
座談会　小山哲×藤原辰史「中高生と考える　戦争・歴史・ウクライナのこと」前編　みんなのミシマガジン　八月
座談会　小山哲×藤原辰史「中高生と考える　戦争・歴史・ウクライナのこと」中編　みんなのミシマガジン　八月
座談会　小山哲×藤原辰史「中高生と考える　戦争・歴史・ウクライナのこと」後編　みんなのミシマガジン　八月
プロムナード　歴史博物館の意味
日本経済新聞　八月二四日
［核兵器と原発］同時に批判する思想を
毎日新聞　八月二五日
プロムナード　生きているファシズム
日本経済新聞　八月三一日
農の美学　第5回「はたらく」と「はたらき」
農業と経済　八八巻三号　八月
座談会　『ベイルート961時間（とそれに伴う321皿の料理）』刊行記念　藤原辰史×関口涼子「食を書く」こと
群像　七七巻九号　九月
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第十九講　災間を生きる大学
クーヨン十月号　二七巻十号　九月
プロムナード　ヤセノヴァツ強制収容所
日本経済新聞夕刊　九月七日
法を生きもののように扱う人　那須耕介さんの「ま、そんなもんやで」―那須耕介さん追悼文集―
九月
プロムナード　トレブリンカ絶滅収容所
日本経済新聞夕刊　九月十四日
プロムナード　アートの最先端は歴史！
日本経済新聞夕刊　九月二一日
プロムナード　「ゲルニカ」を歩いて観る
日本経済新聞夕刊　九月二八日
政治禍としてのコロナ禍　【現場政治の生成】
社会思想史研究　四六号　九月
食と農の歴史をどう学ぶか―映像作品を作るという方法
歴史地理教育　九四五号　十月
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第二十講　コルチャック先生
クーヨン十一月号　二十七巻十一号　十月
プロムナード　どぶろくと税金
日本経済新聞夕刊　十月五日
プロムナード　非進学校こそ日本の根幹
日本経済新聞夕刊　十月十二日
書評　林志弦『犠牲者意識ナショナリズム　国境を越える「記憶」の戦争』
朝日新聞　十月十五日
藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話
第23回　不協和時代の学び　みんなのミシマガジン　十月

羅針盤　ノー検索デー　五つの効用
山陰中央新報　十月十六日
プロムナード　火を囲む　日本経済新聞夕刊　十月十九日
書評　中西嘉宏『ミャンマー現代史』
朝日新聞　十月二三日
食と農の歴史から考える子どもの未来
季刊保育問題研究　三一五号　十月
プロムナード　人文書とイノベーション
日本経済新聞夕刊　十月二六日
古い家族観に決別を
毎日新聞　十月二七日
座談会　枝元なほみ×藤原辰史「女に押し付けられるものがある？」枝元なほみ『捨てない未来―キッチンから、ゆるく、おいしく、フードロスを打ち返す―』
朝日新聞出版　十月
座談会　枝元なほみ×藤原辰史「奪い合うパイは地球にはもうない」枝元なほみ『捨てない未来―キッチンから、ゆるく、おいしく、フードロスを打ち返す―』
朝日新聞出版　十月
座談会　枝元なほみ×藤原辰史「『里芋の皮、揚げると意外にうまいね』の世界」枝元なほみ『捨てない未来―キッチンから、ゆるく、おいしく、フードロスを打ち返す―』
朝日新聞出版　十月
腹にしみる思想：森崎和江の伏流　現代思想：総特集
森崎和江一九二七―二〇二二　五十巻十三号　十月
講談社　十月

◉歴史の屑拾い

「たかり」の思想―食と性の分解論
思想　一一八三号　十一月
インタビュー　硬直した「食」のかたちを解きほぐすために
月刊保団連　一三八四号　十一月
Public Baths and Public Cafeterias. Elina Alter et al（eds.）*CIRCUMFERENCE*. Summer/Fall 2022, Circumference.
十一月
インタビュー　嗜好品は私たちの「心の武装」を解除する
DIG THE TEA　十一月
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第二一講　食べものがない！
クーヨン十二月号　二七巻十二号　十一月
プロムナード　黙食という問題
日本経済新聞夕刊　十一月三日
インタビュー　戦場と同じ思想で、ランチを選ぶ現代人「嗜好品は人間性を保つ上で大切」DIG THE TEA　十一月
書評　キャロル・ヘルストスキー『イタリア料理の誕生』
朝日新聞　十一月五日
プロムナード　津和野を歩く
日本経済新聞夕刊　十一月九日
藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話　第25回　学びが止まらない
みんなのミシマガジン　十一月
書評　朴來群『私たちには記憶すべきことがある』
朝日新聞　十一月十二日
プロムナード　本屋の知性

日本経済新聞夕刊　十一月十六日
時論フォーラム　［死刑制度に反対］存続なら「お任せ感覚」
脱却を　毎日新聞　十一月二四日
プロムナード　出会いの天才
日本経済新聞夕刊　十一月三十日
農の美学　第6回「百姓の国」はあなたを待っている
農業と経済　二〇二二年秋　八八巻四号　十一月
生きのびるブックス　十一月
◉植物考　環境思想・教育研究　十五号　十二月
食の闇について　仕立て屋のサーカスから考える、これからの社会　夕書房通信　六号　十二月
座談会　藤原辰史×曽我大穂
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第二二講　チンゲン祭
クーヨン一月号　二八巻一号　十二月
プロムナード　定員割れをチャンスに
日本経済新聞夕刊　十二月七日
座談会　藤原辰史×小澤慶介　作る、開く、解くから考える
エコロジー　アーカスプロジェクト活動記録集二〇二〇―二〇二一　十二月
羅針盤　故郷での講演会　錦飾るのではなく「試験」
山陰中央新報　十二月十一日
プロムナード　読書に燃え立つ学生たち
日本経済新聞夕刊　十二月十四日
インタビュー　給食の役割は　費用は誰が　公が担う「家族の枠組み出たケアの場」　朝日新聞　十二月十四日
藤原辰史×伊原康隆　学ぶとは何か―数学と歴史学の対話
第27回　コンピューターの学びと人間の学び
みんなのミシマガジン　十二月
書評　上野正道『ジョン・デューイ　民主主義と教育の哲学』
朝日新聞夕刊　十二月十七日
民草論―山﨑佳代子の言葉に触れて―
ちゃぶ台　二〇二二年秋／冬号　十二月
「子ども」から読む現代史　連載第7回　加害者である私
はらっぱ　四〇三号　十二月
プロムナード　保育士礼賛
日本経済新聞夕刊　十二月二一日
時論フォーラム　［安保関連3文書］内閣の存在意義とは
毎日新聞　十二月二二日
22年下半期読書アンケート　図書新聞　十二月二四日
書評委員この1年　朝日新聞　十二月二四日
プロムナード　緊張感　日本経済新聞夕刊　十二月二八日
濁酒の近代―伊藤永之介の『梟』から考える―
史林　一〇六巻一号　一月
座談会　佐伯啓思氏と藤原辰史氏がロング対談「食べること」から未来図を描き直す　京都新聞　一月三日
インタビュー　今、オーガニックを選ぶ意味は？
季刊うかたま　十八巻一号　一月
―映画―『百姓の百の声』制作秘話5
現代農業1月号　百二巻一号　一月
インタビュー　排除ではなく、ともに生きるための「食と農」へ。人と自然、どちらの多様性も認め合う物語を

生活と自治1月号　六四五号　一月
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第二三講　警備員のいない大学　クーヨン二月号　二八巻二号　一月
Philosophie der Zersetzung: Gesellschaft und Natur aus der Sicht des Mülls. Aizawa Keiichi et al（eds.）*Gemeinsame Herausforderungen*. Iudicium Verlag GmbH.　一月
平和戦略としての食糧自給　農業協同組合新聞　一月十日
書評　エマヌエーレ・コッチャ『メタモルフォーゼの哲学』　朝日新聞　一月十四日
「ごみ」とは何か。ごみを、ごみにしない暮らし方　天然生活HP　一月
「分解活動」に参画する、4つの心得とは　天然生活HP　一月
消費によって生を満たさない生き方　天然生活HP　一月
書評　コンラート・H・ヤーラオシュ『灰燼のなかから（上・下）20世紀ヨーロッパ史の試み』　朝日新聞　一月二八日
インタビュー　なぜナチスは有機農業を進めたのか　背景に選挙と「優生思想」　毎日新聞　一月三十日
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第二四講　保育という仕事　クーヨン三月号　二八巻三号　二月
座談会　藤原辰史×猪瀬浩平　土、泥、そして屑と植物を巡って　群像　七八巻二号　二月
気鋭の歴史学者・藤原辰史が、植物をめぐる思考から社会を捉えなおす　GQ VOICE　二月
書評　山崎佳代子『ドナウ、小さな水の旅　ベオグラード発』　朝日新聞　二月十八日
エコロジーと公共政策　関根佳恵『テーマで探究　世界の食・農林漁業・環境2　ほんとうのサステナビリティってなに?』　農山漁村文化協会　二月
羅針盤　ブダペストで知る方言の誇り　山陰中央新報　二月二六日
これからの日本で生きる経験　編集グループSURE　二月
チンプンカンプン大学育学部ゼミ　第二五講　政治と消費　クーヨン四月号　二八巻四号　三月
書評　スヴェン・ベッカート『綿の帝国　グローバル資本主義はいかに生まれたか』　朝日新聞　三月十一日
誰もが生きやすい社会を作るには?　木谷百花編『旅するモヤモヤ相談室』　世界思想社　三月
コラム　私の読書術　木谷百花編『旅するモヤモヤ相談室』　世界思想社　三月
『小さき者たちの』を読んで（前編）　みんなのミシマガジン　三月
『小さき者たちの』を読んで（後編）　みんなのミシマガジン　三月
書評　木村元彦『コソボ　苦闘する新米国家』　朝日新聞　三月十八日
インタビュー　社会を変える給食の可能性　新婦人しんぶん　三四五四号　三月

時論フォーラム　［巨悪との闘い］報道の役割　果たす時　毎日新聞　三月二三日
座談会　星野太一×藤原辰史　「寄生」再考のレジスタンス　週刊読書人　三月二四日
書評　フレドリック・ロゲヴァル『JFK「アメリカの世紀」の新星　一九一七―一九五六（上・下）』　朝日新聞　三月二五日
座談会　藤原辰史×木村元彦「拉致被害者三〇〇〇人」「臓器のプライスリストも」コソボで起きていた〝国家ぐるみの臓器密売犯罪〟の闇　集英社オンライン　三月
◉*Handbook of Environmental History in Japan*, MHM Limited（編著）.　三月
案内　『桑原武夫の世界―福井県ふるさと文学館「没後30年桑原武夫展」の記録』　中国研究月報　七七巻三号　三月

船山　徹

◉仏教漢語　語義解釈：漢字で深める仏教理解　臨川書店　五月
『梵網経』の教えを今に活かす　衆會　二七号　八月
書評　吉川忠夫著『六朝隋唐文史哲論集Ⅱ：宗教の諸相』　唐代史研究　二五号　八月
『今昔物語集』巻四「龍樹・提婆二菩薩伝法語」における日本化の諸相　説話文学研究　五七号　九月
Jizang's 吉藏 Sanskrit In Silk, Jonathan A., and Stefano Zacchetti (eds.), *Chinese Buddhism and the Scholarship of Erik Zürcher*, Brill　一月
失訳仏典『薩婆多毘尼毘婆沙』九巻の漢訳年と漢訳地　東方學　一四五輯　一月
◉増補改訂版　東アジア仏教の生活規則　梵網経―最古の形と発展の歴史　臨川書店　三月

古松崇志

元代《遼史》、《金史》、《宋史》三史的編纂過程―以脩端《辯遼宋金正統》爲中心　歐亞譯叢　六輯　十一月

宮　紀子

象の輿に乗って：モンゴル時代史鶏肋抄（一〇）　究　一三三　四月
キリンが来る！：モンゴル時代史鶏肋抄（一一）　究　一三四　五月
新異なるアフリカ：モンゴル時代史鶏肋抄（一二）　究　一三五　六月
描かれたヨーロッパ：モンゴル時代史鶏肋抄（一三）　究　一三六　七月
絵図で読み解くモンゴル時代の東西交流『京都国立博物館二〇二二年夏期講座：動乱の時代―一四世紀』　八月
ヨーロッパの権力者たち：モンゴル時代史鶏肋抄（一四）　究　一三七　八月
ヨーロッパからの輸入品：モンゴル時代史鶏肋抄（一五）　究　一三八　九月

天翔ける駿馬：モンゴル時代史鶏肋抄（一六）　究　一三九　十月
君主は金繍がお好き：モンゴル時代史鶏肋抄（一七）　究　一四〇　十一月
大（イェケ）モンゴル国（ウルス）からみたヨーロッパ　二〇二二年度西洋史研究会大会要旨集　十一月
ファッションモードはカアンから：モンゴル時代史鶏肋抄（一八）　究　一四一　十二月
消化・継承されるファッション：モンゴル時代史鶏肋抄（一九）　究　一四二　一月
（令和四年度秋季学術大会講演要旨）モンゴル時代の「知」の遺産　東方学　一四五　一月
「大元大モンゴル国の中国統治」、「アフロ・ユーラシアをめぐる人・物・知」、「モンゴル朝廷と漢字文化」中西竜也・増田知之編『よくわかる中国史』　ミネルヴァ書房　二月
オルガンの調べに乗せて：モンゴル時代史鶏肋抄（二〇）　究　一四三　二月
奏で称えよ、我らが黄金の歴史を：モンゴル時代史鶏肋抄（二一）　究　一四四　三月

宮宅　潔

21世紀以来日本学界秦漢史研究新進展（石洋編訳）　中国史研究動態二〇二二年第五期　十月
岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注稿　その（五）（共訳）　東方学報　京都九七冊　十二月
「東洋史から東アジア史へ：中国古代史研究のための提言」へのコメント　『学習院大学東洋文化研究所設立70周年記念シンポジウム「世界に展開する東洋学―海外と日本の中国史研究―」講演資料集』　十二月
孫聞博「新獲封泥与秦県用印制度」読後　『木簡に反映された古代東アジアの法制と行政制度』　慶北大学　一月
◉岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注（編著）　汲古書院　三月
序論―岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》解題―　『岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注』　汲古書院　三月
廷内史郡二千石官共令　『岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注』　汲古書院　三月

向井佑介

Tile Kilns and Roof-Tile Production in Ancient China. NAGATOMO Tomoko et al. (eds.), *Kilns in East and North Asia: The Adoption of Ceramic Industries* BAR Publishing　六月
泰山霊巌寺の成立過程　菱田哲郎編『聖地霊場の成立についての分野横断的研究　京都府立大学文化遺産叢書二五』　京都府立大学文学部歴史学科　九月
呉越国をめぐる南北文化交流　瀧朝子編『呉越国　一〇世紀東アジアに華開いた文化国家（アジア遊学二七四）』　勉誠出版　十月
翻訳　銭国祥「漢魏帝都洛陽の空間構造」　黄暁芬編『古代

東アジア都市の構造と変遷』　同成社　十二月
翻訳　朱岩石・沈麗華・何利群「鄴城考古の新発見からみた北朝後期都城の空間秩序」黄暁芬編『古代東アジア都市の構造と変遷』　同成社　十二月
洛陽西朱村曹魏墓出土石牌銘選注（共著）　東方学報　九七冊　十二月

◉馬・車馬・騎馬の考古学―東方ユーラシアの馬文化（共編著）　臨川書店　三月
中国における騎馬の導入と展開　諫早直人・向井佑介編『馬・車馬・騎馬の考古学―東方ユーラシアの馬文化』　臨川書店　三月

村上　衛

第三章　経済史　岡本隆司・吉澤誠一郎編、袁広泉・袁広偉訳『近代中国研究入門』　当代世界出版社　四月
清朝の開港の歴史的位相　林佳世子・吉澤誠一郎責任編集『岩波講座世界歴史一七　近代アジアの動態　一九世紀』　岩波書店　七月
書評　神田さやこ『塩とインド―市場・商人・イギリス東インド会社』　社会経済史学　八八巻四号　二月

守岡知彦

分権的 Web 基盤としての IPFS　IM 2022年5・6月号　四月
CHISE における HDIC 統合の試み　情報処理学会研究報告 2022-CH-129巻　一二号　五月
低品質文字画像を用いた高精細画像における字形画像の自動再切り出しの試み　東洋学へのコンピュータ利用　第35回研究セミナー　七月
文字情報サービス環境 CHISE 第一回―素性の集合に基づく文字表現―　IM 9・10月号　八月
文字情報サービス環境 CHISE 第二回―漢字構造記述―　IM 11・12月号　十月
文字情報サービス環境　CHISE　第三回―漢字の字体用例と古字書―　IM 1・2月号　十二月
CHISE における HDIC サポートの現状と課題　漢字字体規範史データセット保存会第4回シンポジウム「古辞書データ共有と拡張」　一月

森本淳生

翻訳　ジャン・モレアス「花の敷かれた道」（『情熱の巡礼者』所収）―翻訳と註解の試み（鳥山定嗣と共訳）　日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」https://www.paul-valery-japon.com/blog　二月
翻訳　ジャン・モレアス「追憶する騎士が語ったこと」（『情熱の巡礼者』所収）―翻訳と註解の試み（鳥山定嗣と共訳）　日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」https://www.paul-valery-japon.com/blog　三月

◉*Les belles lettres dangereuses: Le destin de l'épistolarité littéraire du XVIIe au XIXe siècle Zinbun* 53　三月

«Introduction: De l'épistolarité kaléidoscopique»; «Esquisse du problème épistolaire chez Rétif de La Bretonne», Atsuo MORIMOTO (ed.) Dossier spécial: *Les belles lettres dangereuses: Le destin de l'épistolarité littéraire du XVIIe au XIXe siècle Zinbun* 53　三月

矢木　毅

高麗国とその周辺『東アジアの展開　八～一四世紀』（岩波講座「世界歴史」07）　岩波書店　四月

◉評伝　成牛渓―朝鮮の孔子廟と儒学者　臨川書店　七月

安岡　孝一

単語間に区切りのない書写言語における係り受け解析エンジンの開発　学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点第14回シンポジウム　七月

青空文庫 DeBERTa モデルによる国語研長単位係り受け解析　東洋学へのコンピュータ利用第三五回研究セミナー　七月二九日

古典中国語の形態素解析と係り受け解析　근역한문학회 2022 년 추계 기획학술대회：디지털과 한문 고전 연구　十一月二六日

Universal Dependencies 와 BERT/RoBERTa 모델을 통한 고전 중국어 정보처리 *Journal of Applied Studies on Sinograph and Literary Sinitic*, Vol.1　十二月

ローマ字・カタカナ・キリル文字併用アイヌ語 RoBERTa・DeBERTa モデルの開発　情報処理学会研究報告 Vol. 2023-CH-13　二月十八日

楊　維公

江戸時代における叢書『説鈴』の利用についての小考　汲古　八一号　六月

顔音痴な私とオンラインでの日常　人文　六九号　六月

人文
第七〇号
二〇二三年六月三十日
京都大学人文科学研究所発行
共同印刷工業
非売品